

WORLD  
TSUNAMI  
AWARENESS  
5 NOVEMBER  
2018 DAY



# 「世界津波の日」2018 高校生サミット in 和歌山 ～「稲むらの火」発祥の地で濱口梧陵の精神を共に学ぶ～

## 報 告 書





# 目次

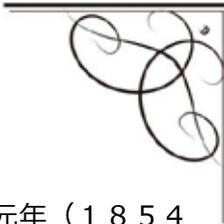
---

稲むらの火 継承宣言 .....	1
高校生議長による閉会メッセージ .....	2
1. 記録写真 .....	3
2. 開催概要 .....	27
3. スケジュール .....	29
4. 参加高校一覧 .....	30
5. 主催者挨拶 .....	32
6. 共催者挨拶 .....	35
7. 内閣総理大臣挨拶（ビデオメッセージ） .....	36
8. 「世界津波の日」提唱者挨拶 .....	37
9. 来賓挨拶 .....	38
10. スタディーツアー報告 .....	41
11. 分科会グループ .....	43
12. 分科会報告 .....	46
13. 参加者アンケート .....	100





## 稲むらの火 継承宣言



2015年12月の国連総会で11月5日が「世界津波の日」と制定されたのは、安政元年（1854年）11月5日、安政南海地震による津波が現在の和歌山県広川町を襲った際、濱口梧陵が稲むらに火をつけ、村人を高台へ導いて、多くの命を救った「稲むらの火」の故事にちなんだものです。

その後、濱口梧陵は自らの財産を使って村の再生を支援し、将来の津波に備えて堤防を築き、この堤防は昭和21年（1946年）12月の昭和南海地震による津波の被害を最小限に抑えました。

これから私たちが、それぞれの国で防災活動に取り組むうえで、「稲むらの火」の故事に含まれる①人命救助、②地域の復旧・復興、③将来の災害への備え、の3つの要素を考えることは、非常に大切なことです。

本年、私たち世界48カ国の高校生は「稲むらの火」発祥の地である和歌山県に集まり、地震津波などの自然災害から命を守るため、私たちが何をすべきか、私たちに何が出来るかを話し合い、共有しました。

### 1 災害について知識を得る

- 自然災害に対する備えができていないことが最も憂慮すべき問題であると感じました。
- 生徒全員が学べるよう、自然災害に関する教科課程に組み入れられるアイデアを共有しました。
- 地域住民全員と災害リスク軽減活動（避難訓練など）に取り組んでいきたいと思ひます。

### 2 災害に備え意識を高める

- 災害とは、地域ごとに異なる地理的特徴と関係があると感じました。
- 被災者の話を聞き災害に対する備えの重要性について市民の意識を高めるためのアイデアを共有しました。
- 各種ツール（HOPE情報など）について知り、実際の避難時に人々の助けになるようなユニバーサルデザインの標識を設置する努力をしようと思ひます。

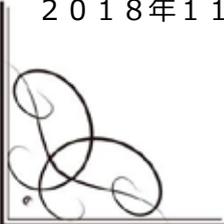
### 3 災害から生き抜く

- 災害後の復旧・復興について事前に計画を立てることが重要だと感じました。
- 災害前・災害時・災害後の助け合いの重要性について認識を共有しました。
- 地域のリーダーまたは専門家による講演やハザードマップを通して自然災害のリスクについて啓発し、災害時にパニックに陥らないよう明確なルールと計画を作成しようと思ひます。

世界中の防災意識をさらに向上させていくため、私たち若い世代が濱口梧陵をはじめとする偉大な先人の志を継承し、このサミットにおいて学んだ「災害から命を守る」ためになすべきことを、それぞれの国において、私たち一人一人が実践していく決意をここに宣言します。

2018年11月1日

「世界津波の日」2018高校生サミット in 和歌山



## 高校生議長による閉会メッセージ



ここ『「世界津波の日」 2018高校生サミットin和歌山』で、私達は「稲むらの火」の精神を将来へ継承していくことを宣言しました。

「稲むらの火」の精神への私たちの誓いを示すため、稲むらに放たれた火に敬意を表し、皆でトーチを掲げましょう！

今回のサミットでは、すべての国にとって貴重な多くのことを学ぶことができました。防災という言葉は、単に私たちの命を守るだけでなく、私たちにとって貴重なものを守っていくという意味です。皆さんが学んだことを、皆さんの地域社会に持ち帰ってください。そして将来の災害に備えていきましょう。世界の防災においてリーダーとなるのは、私たち、若き津波防災大使です。だからこそ、私たちがしっかりと行動を起こすことで世界を変えられるということを忘れないでください。

このサミットで皆さんの防災に対する理解が深まり友情が築かれたと思います。地震津波への備えや、お互いを助け合うことについて、私たちの意識はより高まりました。私たちの故郷、ここ和歌山に来ていただきありがとうございました。楽しんでいただけましたか。

今後も友情を育んでいきましょう。

火を象徴とし、「稲むらの火」の精神がここにいる私たち全員の心に広がりました。心の中の火を消すことなく、その精神を皆さんのまわりの人たちと共有してください。

これもちまして、『「世界津波の日」 2018高校生サミットin和歌山』を閉会いたします。  
ありがとうございました。

高校生議長

中井 充歩 (和歌山県立日高高等学校3年生)

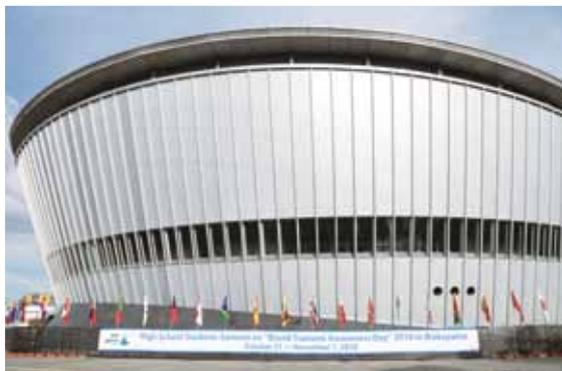
伊森 安美 (和歌山県立串本古座高等学校2年生)





# 1. 記録写真 (サミット (10月31日))

## ◇会場 (ビッグホエール)

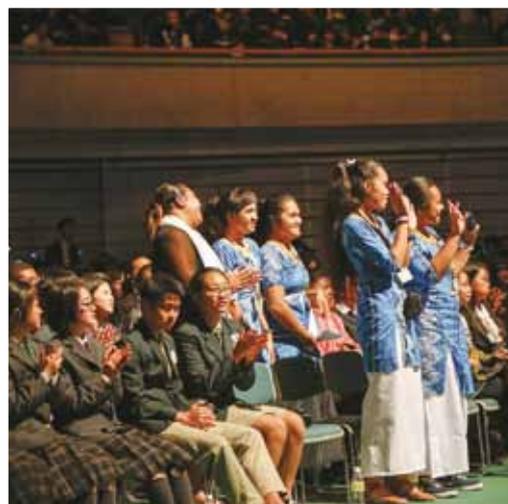
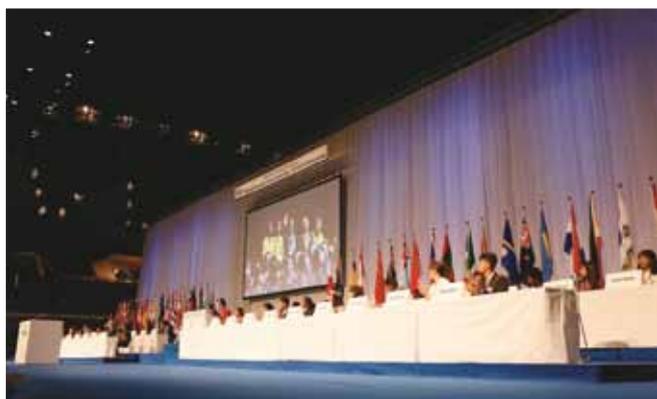


## ◇参加者到着時



# 1. 記録写真 (サミット (10月31日))

## ◇開会式



# 1. 記録写真 (サミット (10月31日))

## ◇開会式



# 1. 記録写真 (サミット (10月31日))

## ◇ 記念植樹・記念碑除幕式



# 1. 記録写真 (サミット (10月31日))

## ◇分科会～プレゼンテーション～



# 1. 記録写真 (サミット (10月31日))

## ◇レセプション



# 1. 記録写真 (サミット (11月1日))

## ◇分科会～ディスカッション～



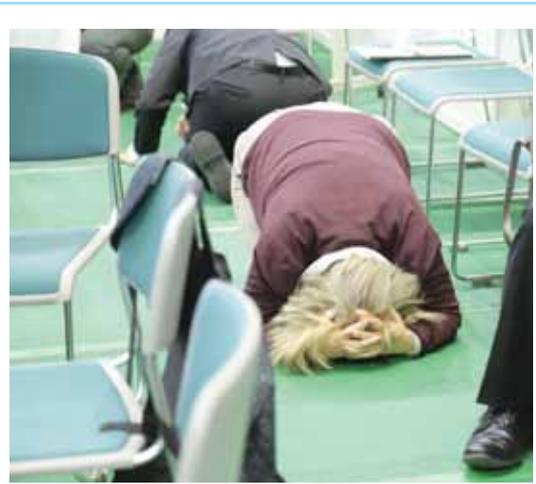
# 1. 記録写真 (サミット (11月1日))

## ◇分科会～ディスカッション～



# 1. 記録写真 (サミット (11月1日))

## ◇分科会～ディスカッション～



(※ 分科会時に緊急地震速報を用いたシェイクアウト訓練を実施)

## ◇津波防災講演会



(講演者：東京大学大学院情報学環 片田 敏孝 特任教授)

# 1. 記録写真 (サミット (11月1日))

## ◇ 総会



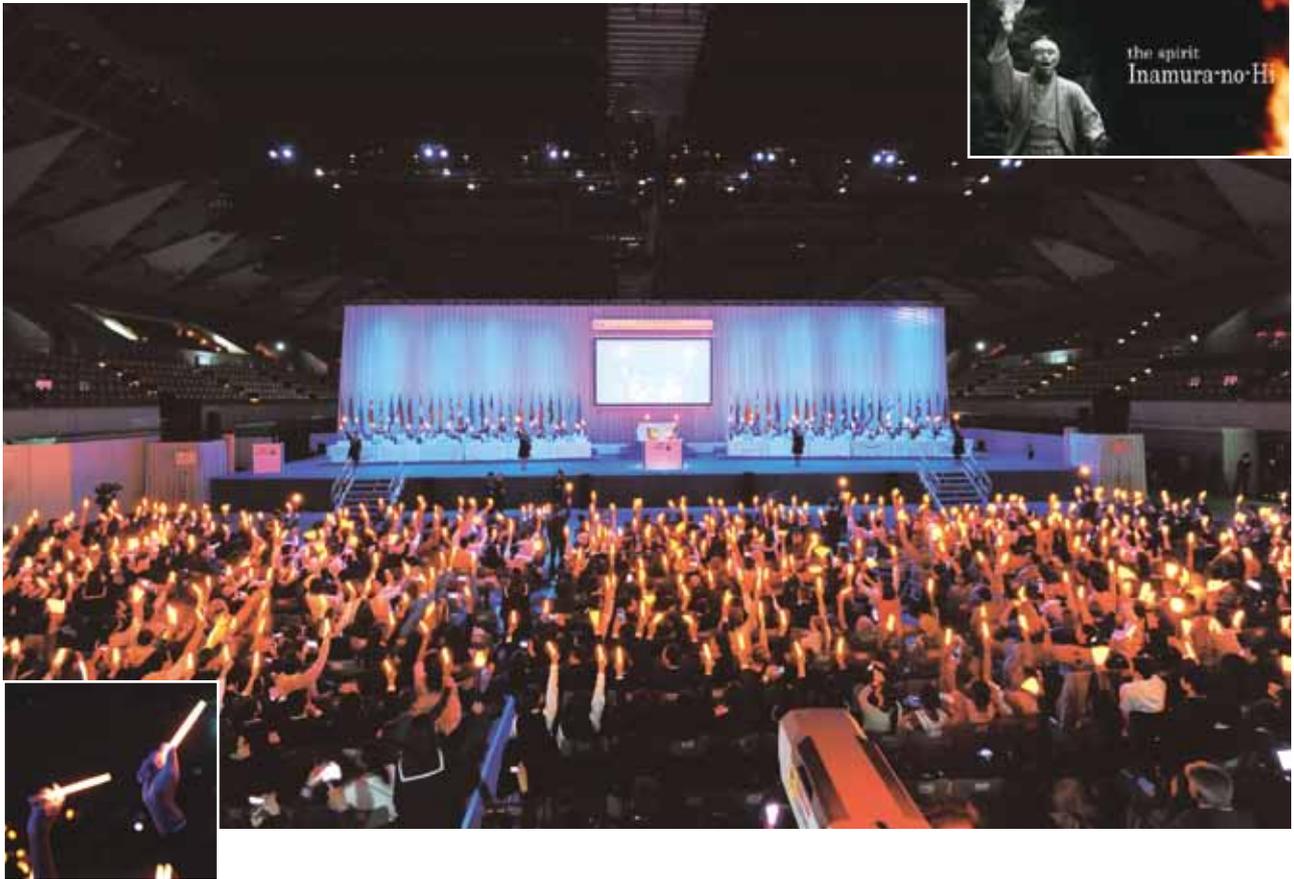
# 1. 記録写真 (サミット (11月1日))

## ◇ 総会



# 1. 記録写真 (サミット (11月1日))

## ◇閉会式



## ◇サミット終了後



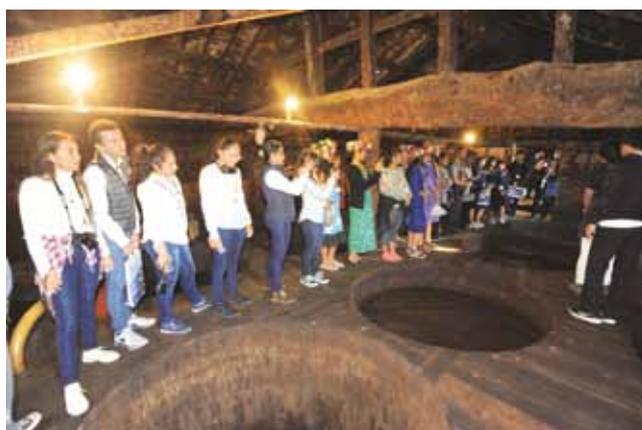
# 1. 記録写真 (稲むらの火祭り (10月28日))

## ◇稲むらの火祭り



# 1. 記録写真 (スタディツアー (10月29日・30日))

## ◇稲むらの火の館・広村堤防等



# 1. 記録写真 (スタディツアー (10月29日・30日))

## ◇耐久高等学校 (歓迎式典・クラス交流)



# 1. 記録写真 (スタディツアー (10月29日・30日))

## ◇日高高等学校 (避難訓練・防災スクール)



## ◇串本古座高等学校 (鉄學)



(※鉄學・・・列車からの避難訓練等を行う鉄道防災教育)

# 1. 記録写真 (スタディツアー (10月29日・30日))

## ◇津波避難用高台 (美浜町)



## ◇土砂災害啓発センター、那智大社等(那智勝浦町)



(※新宮高等学校生徒が説明)

## ◇小・中学生等による歓迎 (広川町)



## 1. 記録写真 (県内高校生への参加 (サミット会場))

サミットへの参加以外にも、司会や受付、参加者への記念品の作成等、多くの県内高校生が参加し、サミットを盛り上げてくれました。

### 総合司会



那賀高等学校



日高高等学校

### 記念植樹司会



桐蔭高等学校



### ウェルカム演奏



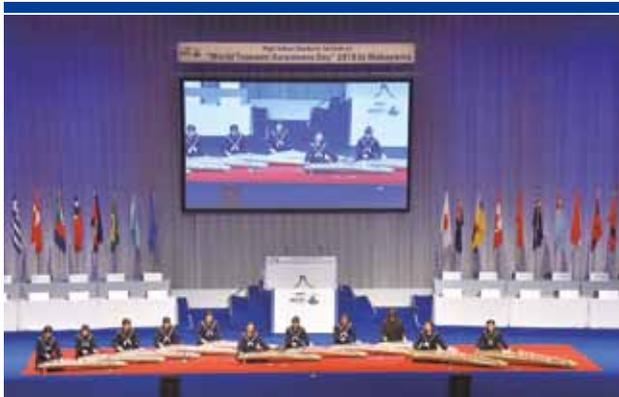
星林高等学校



向陽高等学校

# 1. 記録写真 (県内高校生の参加 (サミット会場))

## オープニングアトラクション



橋本高等学校



紀北農芸高等学校



## 受付／会場誘導等



粉河高等学校・那賀高等学校・和歌山高等学校・向陽高等学校  
星林高等学校・和歌山商業高等学校・和歌山北高等学校 (西校舎)  
海南高等学校 (大成校舎)・田辺工業高等学校

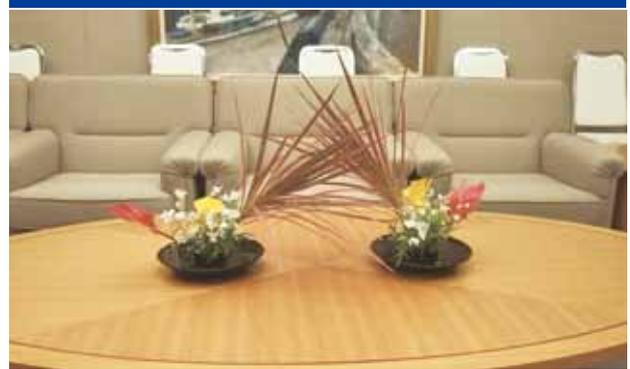
# 1. 記録写真 (県内高校生への参加 (サミット会場))

## あんぽ柿の提供



紀北農芸高等学校

## 生け花・花器



向陽高等学校・はまゆう支援学校  
紀伊コスモス支援学校

## 歓迎花壇



南部高等学校



有田中央高等学校

## ソーラーカー展示



紀北工業高等学校

## ブース展示



向陽高等学校

# 1. 記録写真 (県内高校生の参加)

## 高校生サミット推進室の看板揮毫



串本古座高等学校

## バッジ・記念品作成



和歌山盲学校・和歌山ろう学校  
きのかわ支援学校・みくまの支援学校  
和歌山さくら支援学校



たちばな支援学校

## 参加国へ応援メッセージ



橋本高等学校・紀北工業高等学校・紀北農芸高等学校・粉河高等学校・那賀高等学校  
貴志川高等学校・和歌山北高等学校 (北校舎・西校舎)・和歌山高等学校  
向陽高等学校・桐蔭高等学校・星林高等学校・和歌山工業高等学校・海南高等学校  
海南高等学校 (大成校舎)・海南高等学校 (美里分校)・箕島高等学校・有田中央高等学校  
耐久高等学校・日高高等学校・日高高等学校 (中津分校)・紀央館高等学校  
南部高等学校 (龍神分校)・田辺高等学校・田辺工業高等学校・神島高等学校  
串本古座高等学校・新宮高等学校・新翔高等学校・伊都中央高等学校 (定時制)  
きのくに青雲高等学校 (定時制)・和歌山市立和歌山高等学校・智辯学園和歌山高等学校

(※ サミット専用ホームページに掲載)

# 1. 記録写真 (県内高校生の参加)

## 記念樹 (ウバメガシ) の受け入れ



紀北工業高等学校・紀北農芸高等学校・笠田高等学校・粉河高等学校  
那賀高等学校・貴志川高等学校・和歌山北高等学校 (北校舎・西校舎)  
和歌山高等学校・和歌山東高等学校・星林高等学校・和歌山工業高等学校  
海南高等学校・海南高等学校 (美里分校)・箕島高等学校・耐久高等学校  
日高高等学校・熊野高等学校・串本古座高等学校・和歌山市立和歌山高等学校  
きのくに青雲高等学校・南紀高等学校・紀北支援学校  
みはま支援学校・南紀支援学校・みくまの支援学校

(※ サミット終了後、記念樹を県内各校に移植)

## 観 覧



笠田高等学校・粉河高等学校・向陽高等学校・桐蔭高等学校・和歌山東高等学校  
星林高等学校・和歌山商業高等学校・海南高等学校・和歌山市立和歌山高等学校

# 1. 記録写真 (参加生徒の事前交流)

参加者の事前交流の場として、自己紹介動画又は写真を各学校で撮影いただき、サミット専用ホームページに掲載しました。動画・写真の閲覧を通じて、参加者同士の事前交流を図ることができました。  
(※海外30か国・国内42校から提供された動画・写真を掲載)



全体記念撮影



## 2. 開催概要

---

### 1. 開催趣旨

11月5日の「世界津波の日」は、津波の脅威と対策について理解と関心を深めることを目的に、2015年12月の国連総会において、日本が提唱し、我が国をはじめ142か国が共同提案を行い、全会一致で採択されたものです。

この日が「世界津波の日」とされたのは、安政元年（1854年）11月5日、安政南海地震による津波が現在の和歌山県広川町を襲った際、和歌山県の先人である濱口梧陵が稲むらに火をつけ、津波から逃げ遅れた村人を高台へ導いて、多くの命を救った故事にちなんだものです。

濱口梧陵は村人の命を救っただけでなく、その後、村人を雇い莫大な私財を投じて村の再生を支援し、将来の津波に備えて堤防を築きました。この堤防は昭和21年12月の昭和南海地震による津波の被害を最小限に抑えました。

これら「稲むらの火」の故事は、防災について考えるべき3つの要素、①人命救助、②地域の復興、③将来の防災能力を高めること、を全て含んでいます。

地震津波などの自然災害から住民の命を守るためには、世界各地で防災の知見と災害の脅威への深い認識の下、必要な防災、減災、迅速な復旧復興、国際連携に資する施策を総合的かつ計画的に実行することが重要です。

このため、地震津波などの災害から国民の生命、身体、財産の保護、国民生活及び国民経済に及ぼす影響を最小化できる国土強靱化を担う将来のリーダーを育成することを目的とした「世界津波の日」高校生サミットが創設され、一昨年は高知県で、昨年は沖縄県で開催されてきたところです。

高知県においては、30か国の高校生が参加し、「黒潮宣言」が採択されました。沖縄県においては、島しょ国を中心とした26か国の高校生が参加し、「若き津波防災大使ノート」がとりまとめられました。

和歌山県では、津波予測システムを活用した緊急速報メールによる避難の呼びかけや避難場所安全レベルの設定など、先進的な津波対策とともに、毎年、直近の大災害の分析も加えて津波防災講演会を開催し、県民の津波防災意識の向上に努めています。また、一昨年、国において創設された濱口梧陵国際賞受賞者の本県招聘等を通じ、「稲むらの火」の故事を全世界に広めるよう努めています。

濱口梧陵が生まれ活躍した舞台である和歌山県は、「稲むらの火」発祥の地として、今後も「世界津波の日」制定の由来となった濱口梧陵の精神を全世界に発信し、次世代に過去の災害の教訓を伝えることで、津波防災意識をさらに向上させていきます。

過去2回の高校生サミット開催の精神を受け継ぎ、本年は「世界津波の日」ゆかりの地であるここ和歌山県に日本を含む世界各国の高校生を招き、防災分野における将来のリーダーを育成するとともに、災害から世界中の人々の命を守ることを目的に「世界津波の日」2018高校生サミットin和歌山を開催します。

### 2. 主催

和歌山県、和歌山県教育委員会、広川町、広川町教育委員会

### 3. 共催

国連国際防災戦略事務局（UNISDR）駐日事務所

## 2. 開催概要

---

### 4. 後援

国土強靱化推進本部、内閣府政策統括官(防災担当)、外務省、文部科学省  
国土交通省、気象庁、経済協力開発機構(OECD)  
東アジア・アセアン経済研究センター(ERIA)、国立大学法人 和歌山大学、JICA

### 5. 開催日

2018年10月31日(水)～11月1日(木)

### 6. 会場

和歌山ビッグホエール  
[住所]和歌山市手平2丁目1-1

### 7. 参加者

479名

海外招聘者 293名(高校生244名 引率49名/参加国47カ国)

国内参加者 186名(高校生134名 引率52名/参加高校49校)

### 8. 使用言語

英語

### 9. テーマ、分科会

#### (1) 全体テーマ

災害から命を守る

～「稲むらの火」発祥の地、和歌山で濱口梧陵の精神を共に学ぶ～

#### (2) 分科会の分野

##### ①災害について知識を得る

過去の災害からの学び、先人の教え、災害のメカニズムや被害想定等

##### ②災害に備え意識を高める

学校や住まいの防災・減災対策、防災意識の向上、防災訓練等

##### ③災害から生き抜く

避難行動、安否確認、情報収集、避難所運営、復旧・復興等

### 3. スケジュール

10月31日 (水)	
9:30 ~ 11:45	分科会ブリーフィング
11:45 ~ 12:45	昼食
【開会式】	
12:45 ~ 13:05	開式 (高校生議長)・参加国紹介
13:05 ~ 13:15	主催者挨拶
13:15 ~ 13:35	スタディーツアー報告
【記念植樹・記念碑除幕式】	
14:20 ~ 14:35	記念植樹・記念碑除幕式
15:05 ~ 15:15	記念撮影
【分科会】	
15:25 ~ 16:45	分科会 (各校からの発表・質疑応答等)
【レセプション】	
18:00 ~ 20:00	レセプション

11月1日 (木)	
【分科会】	
9:30 ~ 12:00	分科会 (ディスカッション・グループ総括等)
12:00 ~ 13:00	昼食 (兼 宣言文検討会)
【講演】	
13:00 ~ 14:00	津波防災講演会
【総会・閉会式】	
14:20 ~ 14:35	オープニングアトラクション
14:35 ~ 14:37	総会開会宣言 (高校生議長)
14:37 ~ 15:12	主催者挨拶・共催者挨拶・提唱者挨拶・来賓挨拶
15:12 ~ 16:40	分科会報告
16:40 ~ 16:45	大会宣言
16:45 ~ 17:00	閉会式・閉会宣言

## 4. 参加高校一覧

### 海外参加高校一覧

番号	国名	学校名	参加人数						合計
			生徒		引率				
			男子	女子	男性	女性			
1	アルゼンチン	Normal School "Juan Garcia de Cossio"	5	2	3	1	0	1	6
2	オーストラリア	Broome Senior High School	5	1	4	1	0	1	6
3	ブラジル	School for Basic Education Professor João Widemann	5	1	4	1	1	0	6
4	ブルネイ	Maktab Duli Pengiran Muda Al-Muhtadee Billah College	5	2	3	1	0	1	6
5	カンボジア	KEO POSH	5	2	3	1	1	0	6
6	カナダ	Alberni District Secondary School	5	0	5	1	0	1	6
7	チリ	Colegio Arica College	5	2	3	1	1	0	6
8	中国	Cuiying Middle School of Jimo Qingdao	10	4	6	2	1	1	12
9	コモロ	Said Mohamed Cheik Le Phare Mougini Baraka	5	3	2	1	1	0	6
10	クック諸島	Tereora College Nukutere College Titikaveka College Papaaroa Adventish School	5	0	5	1	0	1	6
11	デンマーク	Rysensteen Gymnasium	5	3	2	1	1	0	6
12	フィジー	Koro Island High School	5	3	2	1	1	0	6
13	ギリシア	2ND GENERAL LYCEUM AGGELOS SIKELIANOS	5	4	1	1	1	0	6
14	インドネシア	SMAN 2 Banda Aceh	10	2	8	2	1	1	12
15	キリバス	King George The fifth and Elaine Bernacchi School	5	2	3	1	0	1	6
16	ラオス	Vientiane high School	5	2	3	1	0	1	6
17	マレーシア	Sekolah Menengah Sains Tengku Muhammad Faris Petra	5	2	3	1	0	1	6
18	モルジブ	Ahmadhiyya International School Center for Higher Secondary Education Billabong High International School	5	2	3	1	0	1	6
19	マーシャル	Laura High School	5	2	3	1	1	0	6
20	メキシコ	University of guerrero	5	1	4	1	0	1	6
21	ミクロネシア	Outer Islands High School	5	4	1	1	1	0	6
22	モンゴル	Mongolian-Russian Joint School Primary, Middle and High School No.6 of skhubaatar district in Ulaanbaatar	5	2	3	1	0	1	6
23	ミャンマー	No.2 Basic Education High School, Laputta	5	3	2	1	1	0	6
24	ナウル	Nauru Secondary School	5	2	3	1	0	1	6
25	ネパール	Mahendrodaya Secondary School Madi Secondary School Sahid Smriti Awasiya Secondary School Janata Secondary School Laligurans Batika Secondary School Motherland School	5	3	2	1	1	0	6
26	ニュージーランド	Heretaunga College Upper Hutt College	5	0	5	1	0	1	6
27	ニウエ	Niue High School	5	3	2	1	1	0	6
28	パラオ	Palau Mission Academy	5	1	4	1	0	1	6
29	パプアニューギニア	Port Moresby National High School	5	3	2	1	1	0	6
30	パラグアイ	Colegio Japonés Paraguayo	5	2	3	1	1	0	6
31	ペルー	Colegio Mixto Público Nacional Callao	5	3	2	1	1	0	6
32	フィリピン	Bienvenido Guillera Celebre National High School	5	2	3	1	1	0	6
33	ポルトガル	Escola Secundária Ferreira Dias Agulva-Sintra	5	1	4	1	0	1	6
34	大韓民国	Incheon Daegun High School	4	4	0	1	1	0	5
35	サモア	St. Mary's College	5	0	5	1	0	1	6
36	シンガポール	Temasek Junior College	5	1	4	1	0	1	6
37	ソロモン	White River Community High school	5	2	3	1	0	1	6
38	スペイン	IES Belén	5	3	2	1	0	1	6
39	スリランカ	Rahula College Sujatha Vidyālaya Richimond College, Galle	5	2	3	1	0	1	6
40	タイ	Koh yao wittaya school	5	1	4	1	0	1	6
41	トンガ	Tonga High School	5	5	0	1	1	0	6
42	トルコ	ISTANBUL ATATURK HIGH SCHOOL OF SCIENCE	5	0	5	1	0	1	6
43	ツバル	Motufoua Secondary School	5	3	2	1	1	0	6
44	米国	WAI'ANAE HIGH SCHOOL	5	3	2	1	0	1	6
45	バヌアツ	Central School	5	2	3	1	1	0	6
46	ベネズエラ	COLEGIO SAN JOSE HH MARISTAS	5	2	3	1	1	0	6
47	ベトナム	Yen Hoa Cau Giay	5	3	2	1	0	1	6
			244	100	144	49	23	26	293

## 4. 参加高校一覧

### 国内参加高校一覧

番号	都道府県	学校名	参加人数						合計
			生徒		引率				
			男子	女子	男性	女性			
1	北海道	北海道浦河高等学校	3	0	3	1	1	0	4
2	北海道	学校法人札幌日本大学学園 札幌日本大学高等学校	3	0	3	1	1	0	4
3	岩手県	岩手県立釜石高等学校	2	0	2	1	0	1	3
4	岩手県	岩手県立宮古工業高等学校	3	3	0	2	1	1	5
5	岩手県	学校法人龍澤学園 盛岡中央高等学校	3	0	3	1	1	0	4
6	宮城県	宮城県仙台第一高等学校	3	2	1	1	1	0	4
7	宮城県	宮城県多賀城高等学校	3	0	3	1	1	0	4
8	栃木県	栃木県立佐野高等学校	1	1	0	1	1	0	2
9	埼玉県	埼玉県立不動岡高等学校	2	0	2	1	1	0	3
10	千葉県	千葉市立稲毛高等学校	3	2	1	1	1	0	4
11	東京都	東京学芸大学附属国際中等教育学校	3	0	3	1	0	1	4
12	東京都	学校法人富士見丘学園 富士見丘中学校高等学校	2	0	2	1	1	0	3
13	神奈川県	横浜市立横浜サイエンスフロンティア高等学校	2	1	1	1	1	0	3
14	静岡県	静岡県立池新田高等学校	2	0	2	1	1	0	3
15	静岡県	静岡県立裾野高等学校	2	0	2	1	1	0	3
16	京都府	学校法人立命館 立命館高等学校	3	0	3	1	1	0	4
17	大阪府	大阪教育大学附属高等学校平野校舎	3	0	3	1	1	0	4
18	大阪府	大阪府立西成高等学校	2	2	0	2	1	1	4
19	大阪府	学校法人大阪学園 大阪高等学校	3	1	2	2	2	0	5
20	大阪府	学校法人関西学院 関西学院千里国際高等部	3	1	2	1	0	1	4
21	大阪府	学校法人創価学園 関西創価高等学校	3	0	3	1	1	0	4
22	兵庫県	神戸大学附属中等教育学校	3	0	3	1	1	0	4
23	兵庫県	兵庫県立尼崎小田高等学校	4	0	4	1	1	0	5
24	兵庫県	兵庫県立舞子高等学校	2	2	0	1	1	0	3
25	奈良県	奈良県立畝傍高等学校	3	1	2	1	1	0	4
26	奈良県	学校法人西大和学園 西大和学園中学校・高等学校	3	1	2	1	0	1	4
27	和歌山県	和歌山県立海南高等学校	3	0	3	1	1	0	4
28	和歌山県	和歌山県立串本古座高等学校	4	0	4	1	1	0	5
29	和歌山県	和歌山県立新宮高等学校	2	0	2	1	1	0	3
30	和歌山県	和歌山県立星林高等学校	3	0	3	1	0	1	4
31	和歌山県	和歌山県立耐久高等学校	4	1	3	1	1	0	5
32	和歌山県	和歌山県立田辺高等学校	2	0	2	1	1	0	3
33	和歌山県	和歌山県立橋本高等学校	3	0	3	1	1	0	4
34	和歌山県	和歌山県立日高高等学校	4	0	4	1	1	0	5
35	和歌山県	智辯学園和歌山高等学校	3	0	3	1	1	0	4
36	岡山県	岡山県立井原高等学校	3	1	2	1	0	1	4
37	広島県	広島県立広島中学校・広島高等学校	2	0	2	1	1	0	3
38	徳島県	徳島県立城南高等学校	3	3	0	1	1	0	4
39	愛媛県	愛媛県立宇和島東高等学校	2	1	1	1	1	0	3
40	愛媛県	愛媛県立西条高等学校	3	3	0	1	1	0	4
41	高知県	高知県立清水高等学校	3	1	2	1	1	0	4
42	高知県	高知県立中村高等学校	2	1	1	1	0	1	3
43	高知県	高知県立嶺北高等学校	2	0	2	1	1	0	3
44	高知県	学校法人土佐塾学園 土佐塾高等学校	2	0	2	1	1	0	3
45	高知県	学校法人明德義塾 明德義塾高等学校	3	0	3	1	1	0	4
46	福岡県	学校法人コンプレガシオン・ド・ノートルダム 明治学園中学校・高等学校	4	4	0	1	1	0	5
47	熊本県	熊本県立天草高等学校	3	0	3	1	1	0	4
48	熊本県	熊本県立済々黉高等学校	2	1	1	1	1	0	3
49	大分県	大分県立佐伯鶴城高等学校	3	2	1	1	1	0	4
			134	35	99	52	43	9	186

## 5. 主催者挨拶



仁坂 吉伸

和歌山県知事

和歌山県知事の仁坂吉伸です。この「世界津波の日」高校生サミットの開催地を代表して、全世界からお集まりの高校生諸君に心から歓迎を申し上げます。また、この大会のために日本全国からお集まり下さった来賓の方々、各地の防災の指導者の方々にも心から歓迎を申し上げます。和歌山へようこそ。

この大会のために、様々な準備のため大変な献身をして下さった外務省を始め日本政府の方々、地元の関係者の皆さんに心からお礼を申し上げます。とりわけ、私は、世界津波の日制定を真っ先に提案し、その実現のために全力を尽くし、そしてその記念行事として、全世界の高校生諸君を津波対策の勉強のために、日本に招待するプログラムを主導してきた二階俊博衆議院議員、自民党幹事長に感謝を申し上げたい。

本大会の主役はあなた方、全世界からお集まりの高校生諸君です。若い紳士淑女、私は敢えて申し上げますが、あなた方は全世界から集まったエリートです。あなた方はそれぞれの出身国において何千人、何百万人の中から選ばれたエリートであります。あなた方だけが、この機会を利用して得た地震津波に関する正しい知識と、災害から人々を救い、災害から立ち直るノウハウを身につけるチャンスを得ているのです。そのようなチャンスを得られなかった何千人、何百万人の仲間のためにも、あなた方は、これらを用いて将来あなた方の地域の人々やあなた方の国を救う義務があります。

ノーブレス・オブリージュという言葉があります。エリートは、危急の際には、自らの利益や命すら省みず、人々のために尽くさなければならないという意味だと私は思います。このノーブレス・オブリージュを見事に果たした人がこの和歌山で人々を救うために大活躍をした濱口梧陵さんであります。

今から164年前の11月5日、この和歌山を巨大な地震津波が襲いました。濱口さんは和歌山の広川の出身ですが、当時日本全体で大きな醤油会社を経営する企業家でした。広川の生んだエリートであったのです。濱口さんはエリートですから、知識として、地震の後は何度も大きな津波が襲ってくることを知っていました。従って、地震の後は高台に逃げなければならないことを知っていました。しかし、その時は夜で、あたりは真っ暗、広川の人々がこの暗闇の中で、高い所へ逃げてくれるか心配になった濱口さんは、高台にあった収穫直後の米が詰まった稲わら、すなわち農家にとっての全財産に火をつけたのでした。この明かりを目指して高台に逃げた多くの人々が命を救われました。濱口さんは自らの財産を犠牲にして人々の命を救ったのです。

濱口さんの献身はこれに留まりません。被災直後人々は食べるものもなく、家を建て直そうとしても建設材料もありません。濱口さんは惜しげもなく、自らの財産を使って、これらの人々に提供しました。

それでも、人々は仕事もなくなり、収入の途も途絶えていました。そこで、濱口さんは、再び自らの財産を投げうって、広川町に堤防を作ることとし、人々にその建設の仕事を提供したのです。この濱口さんの行

った行為の中に災害に当たって我々がしなければならない全ての要素が含まれています。すなわち、それは人命救助、早期復旧、そして復興と将来の災害への備えであります。

濱口さんは村のエリートでありました。しかし、このような危機の時、濱口さんがこのようなことをしなければならぬという法律上の義務もなければ、領主が命じたわけでもありません。濱口さんは、危機に瀕した自らの出身の村の人々のため、自発的にこのようなことをしたのであります。ここに皆さんは本当のエリートの本当のノーブレス・オブリージュの姿を見ることができます。

地震津波は、プレートテクトニクス理論に従って100年に1回くらいは必ず来ます。1946年この地を、また大きな津波が襲いましたが濱口さんが作った堤防は見事に広川町の人々を救いました。それが今も残る広村堤防であります。

私は、この濱口梧陵さんの行動は、歴史上初めて人類が部分的ではあったが、津波に打ち勝った事例だと思います。だから、国際連合は、この濱口梧陵さんが稲むらに火を付けた11月5日を世界津波の日にしたのです。

濱口梧陵さんの生まれた日本は、度々津波に襲われ、大きな犠牲を払いながら、着実にそれへの対策を強化しています。濱口梧陵さんの生まれた和歌山県も濱口梧陵さんに叱られることがないよう世界一の地震津波対策を数々備えるに至っています。

若い紳士淑女諸君、だからこそ、我々は将来それぞれの国を背負って立つ皆さんに、それぞれの国を救う知識とノウハウを学んでもらおうと、皆さんをこの日本に、そしてこの和歌山にご招待したのです。

若い紳士淑女諸君、この和歌山で濱口梧陵さんの気概に触れ、津波への理解を深め、世界一進んだ地震津波対策を学んで下さい。そしてこのような知識とノウハウを生かし、将来皆さんの国の人々を救って下さい。それがエリートとしての皆さんの務めです。

若い紳士淑女諸君、諸君こそ世界の希望です。この和歌山で懸命に学ぶ諸君に濱口梧陵さんが微笑んでいると私は信じます。

ご静聴ありがとうございました。

## 5. 主催者挨拶

---



西岡 利記

広川町長

皆さん、こんにちは。全世界からお集まりの高校生諸君、ようこそ日本へ、ようこそ和歌山へ。私は「稲むらの火」の町、広川町長の西岡利記でございます。

まず初めに9月28日に発生したインドネシア・スラウェシ島の地震・津波でお亡くなりになりました多くの方々のご冥福をお祈り申し上げます。

全世界からお集まりの高校生が、地震、津波などの自然災害から人々の命を守るため、「世界津波の日」制定と関係の深いこの和歌山に集まり、議論され、未来へと災害の教訓を伝える、このことは非常に意義深いことでございます。

さて、世界の高校生の皆さま方にお会いするのは、これで3回目でございます。第1回は10月28日の夕方に、私どもの「稲むらの火祭り」にご参加いただきました。その際に、皆さま方に広八幡神社で私がお会いさせていただきました。そのときのご感想はどのようなものでしょうか。1854年に起こった津波で、広川の住民が広八幡神社に避難するための松明や稲むらの点火を再現したものを体験していただきました。夜でも津波のときにはいち早く皆で工夫して高台に逃げることを、ぜひ皆さま方の国でも、あなた方が伝えていただきたいと思っております。

次に第2回目は、「稲むらの火の館」でのスタディツアーです。館での3Dシアターで、地震と津波の恐ろしさを体験されたり、国史跡の濱口梧陵が築堤した広村堤防を見学されました。

高校生諸君は、それぞれの国での若き津波防災大使として、地震があれば津波が起こる、そのことを地域住民に伝えると同時に、津波ではいち早く高台に逃げる、津波が収まれば、被害に嘆いてばかりでなくて、いち早く住民の皆さんと復興を呼び掛け、地域再生の率先者になっていただきたいと思っております。

私の住む広川町では、津波に対する備えはもちろん、小学生のときから津波が起これば高台に逃げることを歌や訓練で実行してございます。日頃から避難訓練の大切なことを十分、認識されたことと思いますが、避難訓練は繰り返し、繰り返し実施することが重要です。どうか高校生の諸君、あなた方の国や地域で地震・津波訓練を定期的実施されるよう呼び掛けてください。帰国後のあなた方のご活躍をご期待申し上げます。

最後になりましたが、この大会開催に際し、さまざまな準備のためご尽力をいただきました、外務省をはじめ、日本政府の方々、和歌山県庁の方々、また関係各位に心から御礼を申し上げ、私の歓迎の言葉とさせていただきます。

ご清聴ありがとうございました。

## 6. 共催者挨拶



### 水鳥 真美

国連事務総長特別代表(防災担当) 兼  
国連国際防災戦略事務局 (UNISDR) ヘッド

ご紹介いただきありがとうございます。国連での私の役目は、2030年までにすべての国連加盟国がそれぞれの国が直面する災害を認識し、自らの国の災害に対する強靭性を高めていただくようにすることです。これはたいへんな仕事ではありますが、2015年に日本の仙台市で国連加盟国によって合意され、皆さんの国はこれらに取り組むことを合意しております。ですから、私たちがともに実現していかなければならない仕事なのです。皆さんは、この数日間で多くのことを学んでこられました。そして、必ずやその知識と経験を自国に持ち帰ってくれることでしょう。本当に素晴らしいことです。私は、皆さんがご参加くださったことを称賛したいと思います。もちろん、日本政府、和歌山県と県内市町村、すべての方々にご尽力頂きました。この素晴らしいプロジェクトを提唱してくださった二階幹事長は申し上げるまでもありません。けれども、参加者がいなければ、このプロジェクトは決して実現することはありませんでした。ですから、参加高校生の皆さんすべてにお祝いを申し上げます。

皆さんは帰国した後、将来何をしたいのか、ということを考え始められるのではないのでしょうか。こんなふうを考える人もいるかもしれません。「二階幹事長や仁坂知事のような政治家になって、国を導いていきたい」。もしそうなら、防災をあなたの国の最優先事項にしてください。また、こんなふうにも思うかもしれません。「行政組織で働きたい。できれば自分の町のために働きたい。」もしそうなら、災害リスク軽減と防災を必ず最優先事項としてください。しかし、最終的には、皆さんが何をするかは問題ではありません。なぜなら、防災は誰にとっても優先事項だからです。防災はすべての人にとっての課題です。もし、民間企業で働くことに決めたとしても同じことです。あなたは自分の会社を災害に対して強靭な会社にしなければなりませんし、従業員たちの災害に対する強靭性を高めなければなりません。もし、市民社会で働くことに決めたとしたら、重要な任務を担うこととなります。あなたはそのコミュニティの強靭性を高めなければなりません。そして、やがては母親、父親として、子供を守らねばならなくなるでしょう。両親も年を取りますので、高齢の人々も守らなければなりません。

結局のところ、あなたがどこにいて何をするかはまったく問題ではなく、すべての皆さんがこのことのために尽力しなければならないのです。皆さんは、若き津波防災大使としてここにやってきましたが、その役割から卒業することは決してありません。つまり、若き津波防災大使であり続ける、いつまでも若いというわけにはいかないでしょうが、生きている限り防災に対する大使です。なぜなら、それこそが皆さんがここにやってきた理由なのです。そして、この目的のために活動するときは、この講義で聞いたことを覚えておいてください。つまり、私たちはお年寄りや子供、障害とともに生きる人たちといった、もっとも脆弱な立場にある人たちを守らなければならないということです。皆さんのコミュニティにおいて、協力しながら、また同時に守っていかなければならないのは、このような人たちです。

自然災害そのものを防ぐことのできる国はありませんが、私たちは協働し、人的損失や経済的損失を可能な限り小さくすることができます。しかし、最後にもう1つお伝えしたいことがあります。それは、皆さん全員ができること、気候変動が向かっていく方向を変えるために、皆さんは力を合わせるということです。ここ数年の間に起った災害の90%は気候変動に関連するものです。この方向は皆さん若い世代が革新的な発想と活力をもって変えることができるものです。そして、もしこの方向を変えなければ、皆さんと皆さんに続く世代が本当に平和で安全に暮らすことのできる地球を手にはすることはできません。このことを心に留め、変化を起こしてください。

最後にもう一度、日本政府、和歌山県知事、関係自治体の代表の皆様、そして今回の開催のためにご尽力いただいたすべての方々にお礼申し上げます。高校生の皆さんにもお礼を申し上げたいと思います。こんな英語のことわざがあります。「There's no such thing as a free lunch (この世に無料の昼食などない)」。ご存知でしょうか。つまり、言い換えれば、「この世に無料で楽しめる日本旅行などというものはない」。皆さんは今や、果たさねばならない義務を負っています。どうか頑張ってください。会議後には気を付けて帰国されますように。ありがとうございました。

## 7. 内閣総理大臣挨拶 (ビデオメッセージ)



安倍 晋三

内閣総理大臣

高校生の皆さん、こんにちは。そして、ようこそ日本へ。内閣総理大臣の安倍晋三です。はじめに、先般、インドネシアのスラウェシ島を襲った地震と津波により、非常に多くの尊い命が失われるなど、極めて甚大な被害が生じました。亡くなられた方々に心から哀悼の誠を捧げるとともに、被災された全ての方々にお見舞いを申し上げます。

私たちは、約2万人の犠牲者と甚大な被害をもたらした東日本大震災から多くのことを学びました。防災教育が極めて重要であること、そして、悲しみを乗り越え希望ある未来を創造していくことの大切さ。この経験を世界に広め、分かち合うこと。災害の多い我が国の使命であり、この高校生サミット開催の意義であると考えます。

高校生サミットは、「世界津波の日」に際し、世界各地から次世代を担う若者が集い、地震・津波の脅威や防災・減災について学び、絆を深める貴重な機会です。3回目を迎える今回、「世界津波の日」2018高校生サミットin和歌山」として、過去最多の48カ国の参加により盛大に開催されますこと、誠に喜ばしく思います。

ここ和歌山県において、150年前の大津波から多くの人命を守ったのが濱口梧陵です。小さな漁村を大津波が襲ってきた、まさにその時、村のリーダーであった梧陵は、高台にある自らの稲むらに火をつけ、村民に避難を呼び掛けたのです。

この機転によって多くの村人の命が救われました。「世界津波の日」は、この逸話「稲むらの火」に由来しています。その後、梧陵は、私財を投じて堤防を築き、そのおかげで100年後に発生した大津波からも村は守られました。梧陵は、世代を超えて、尊い命を守ったのです。

皆さんには、この濱口梧陵の精神を受け継いで、将来の防災のリーダーとして世界中で活躍して欲しいと思います。世代を超えて、たくさんの命が救われる、今回のサミットがその嚆矢となることを期待しています。

日本においても、このところ、西日本豪雨や北海道胆振東部地震など、自然災害が相次いで発生しており、政府として、防災・減災、国土強靱化の緊急対策を講じていくこととしています。今日ここに集まった「若き津波防災大使」の皆さんとともに、災害に強いコミュニティ、強靱な国づくりに向け、未来を切り開いていくことをお誓いし、私からの御挨拶とさせていただきます。

## 8. 「世界津波の日」 提唱者挨拶



### 二階 俊博

自由民主党幹事長  
衆議院議員

「世界津波の日」高校生サミットin和歌山にお集まりをいただきました、世界各国から選ばれた高校生の皆さん、ようこそ「稲むらの火」の発祥の地、そして、もっと言えば私の出身地でもあります和歌山県へお越しいただきました。自由民主党幹事長の衆議院議員の二階俊博であります。心から歓迎を申し上げたいと思います。

今年も世界の各地で多くの災害が発生しました。9月28日にはインドネシアのスラウェシ島に大規模な津波が発生し、2,000人を超える尊い命が奪われました。また、私たちは本年も、わが国でも大阪北部地震、九州北部豪雨、北海道胆振東部震災等、多くの自然災害が発生したわけであります。現在もなお、この災害から避難をして、避難生活を余儀なくされておられる方々が多くいらっしゃいます。これらの災害の被害に遭われた全ての皆さんに対し、ここにお集まりの皆さんと共に、心からお見舞いを申し上げたいと存じます。

近年は気候変動の影響もあり、世界の各地で災害が頻発しております。私はこうした自然災害から1人でも多くの命を守るために、国民運動として国土強靱化の取り組みを早くから始めてまいりました。1人の命も失わないということは国土強靱化の基本理念であり、私たちの信念であり、また1人の人間としての使命だと思っております。

2015年には、国連において全会一致で11月5日が「世界津波の日」として制定されました。「世界津波の日」は、ここ和歌山県の有名な逸話である「稲むらの火」に基づくものであります。皆さまには「稲むらの火」の聖地、ご覧になられた方もいらっしゃると思いますが、聖地・和歌山で、災害から1人でも多くの命を守るんだと、そういう決意の下に、皆さんが一緒になって勉強していただいたこの期間は非常に尊いものだと思っております。

若き津波防災大使、私は皆さんのことをこう呼びたいと思います。高校生サミットで学んだことを多くの友人たちにお伝えをいただき、どうぞ今後において津波の被害が1人でも少なくなるように、みんなで努力しようではないですか。そのように、私たちは心からお祈りをしております。

そして、われわれも政治家として、この問題に対してはどんな努力も惜しまない、そういう真剣な決意をいたしております。皆さんが、この短い期間でありましたが、お互いに結ばれた心と心の絆、そして若いということは素晴らしいことだというのは、皆さんが誰の紹介もなくとも、すぐ隣の国の人たち、もっと遠い国の人たちとも仲良しになれるではありませんか。

私はその姿を後ろから拝見をしながら、われわれはこの運動をずっとずっと続けていかななくてはならない。そして多くの友人を世界各国に生んで、いざ津波が来たときに、その皆さんの力でもって少しでも多くの人たち、多くの老人たちを、多くのご婦人たちを、比較的力の弱い、そういう人々を助ける。その勇敢な活動、行動を、われわれはこうした場でお互いに学ぶところから生まれてくるわけであります。

今日、この大会のためにはるばる日本においでをいただいた皆さん、本当にありがとうございます。私たちもまた、やがて皆さんの国を訪ねるときもあると思っております。一緒になって、世界の皆さんと手をつないで、災害を少しでも減らせる方向で、災害を少なくする方向で、みんなで頑張ろうではありませんか。

今日、ここにお集まりをいただきました多くの若い未来のある同志の皆さん、どうぞしっかり頑張って、それぞれの国のために、もっと大きく言えば世界のために頑張ってください、このことを心からお願いして、歓迎の御挨拶とします。

ありがとうございました。

## 9. 来賓挨拶

---



山本 順三

国土強靱化担当大臣

(代読：内閣府副大臣 中根 一幸)

「世界津波の日」2018高校生サミットin和歌山の開催に当たりまして、一言御挨拶申し上げます。本サミットがかくも盛大に開催されますことをお喜び申し上げますとともに、本サミットの開催に御尽力されました主催の和歌山県の仁坂知事をはじめ、自民党の二階幹事長、各国大使、国連国際防災戦略事務局、経済協力開発機構、日中友好会館、その他の関係の皆様にご心より敬意を表します。

さて、本日お集まりの高校生の皆さんは、今から150年以上前の1854年に発生した安政南海地震による津波から、当時の紀伊の国、広村の多くの村人を救った濱口梧陵のエピソードを伝える「稲むらの火の館」や、梧陵が子孫に残した広村堤防を視察し、また、地域の高校生との合同避難訓練などにも取り組まれたと聞いています。

これらの地での視察や交流を通して、日本が津波災害から得てきた知見や経験を学ばれたことと思います。過去に起きた災害を振り返り、一人一人が平時のうちから防災意識を持つこと、災害に備えて行動することは、大変重要です。こうした考えを背景に、国連総会において「世界津波の日」が全会一致で制定されました。

この日に際し、ここ和歌山県で本サミットが開催され、高校生の皆さんが、共通の課題である地震・津波の脅威や防災・減災について意見を交わされることは、大変意義深いものと思います。高校生の皆さん、ご列席の皆さまとともに、本サミットを通じて学んだことをベースに防災の重要性を広めていただき、世界において国土強靱化が進展していくことを祈念し、私からの挨拶とさせていただきます。

## 9. 来賓挨拶



石井 啓一

国土交通大臣

(代読：国土交通大臣政務官 工藤 彰三)

「世界津波の日」2018高校生サミットin和歌山の閉会に際して、一言ごあいさつ申し上げます。本サミットのご盛会を心からお喜び申し上げます。開催にご尽力いただきました、主催の和歌山県の仁坂知事、広川町の西岡町長をはじめ、自由民主党の二階俊博幹事長、各国大使、国連国際防災戦略事務局、経済協力開発機構、東アジア・アセアン経済研究センター、和歌山大学、国際協力機構、その他の関係の皆さまに対し、心より敬意を表する次第であります。

11月5日の「世界津波の日」は、2015年12月の国連総会で142カ国が共同で提案し、全会一致で採択されました。この日が「世界津波の日」とされたのは、1854年・安政元年11月5日、濱口梧陵が稲むらに火をつけ、村人を高台に導き、安政南海地震による津波から多くの村人を救った「稲むらの火」の故事にちなんでいます。濱口梧陵は自らが被災しながらも村の復興を決意し、私財をなげうっていち早く堤防の整備に着手したと伝えられています。この堤防はおよそ90年後の1946年、昭和南海地震の津波から町を守りました。

これらの故事には学ぶべき重要な観点が込められていると思います。1つは堤防などの社会基盤をしっかり整備し災害に備えるという、ハード対策の重要性、もう1つは事前に災害の発生を想定し、災害が発生したときにいかに被害を最小限に食い止めるかというソフト対策の重要性です。

国土交通省では、災害リスクに関する知識と心構えを社会全体で共有し、さまざまな災害に備える「防災意識社会」への転換を図り、整備効果の高いハード対策と住民目線のソフト対策を総動員し、防災・減災対策を推進しています。切迫する南海トラフ巨大地震に対し、想定される具体的な被害特性に合わせ、避難路・避難場所の整備、ゼロメートル地帯の堤防の耐震化等、実効性のある対策を推進しています。

また、ソフト対策として、市町村によるハザードマップの作成支援、避難訓練の実施、緊急地震速報や津波観測情報の迅速化・高度化、防災情報を一元化した防災ポータルや訪日外国人旅行者向け災害時情報提供アプリ「Safety tips」の提供などの防災対策を推進しています。

災害という観点では、この和歌山の地で平成23年9月に紀伊半島大水害と呼ばれる大きな災害が発生しました。紀伊半島において3,000カ所を超える斜面崩壊が発生し、大量の崩壊土砂が河川をふさぎました。このうち規模の大きかった5カ所において土砂災害防止法による緊急調査、9つの地区において砂防堰堤を設置するなど緊急対策工事を行いました。今回のサミットに先だって実施されたスタディツアーでは、和歌山県土砂災害啓発センターにおいて、その対策の概要をご覧いただいたと思います。今後とも地域の復旧・復興に向けて取り組んでまいります。

本日は世界48カ国から約400名の高校生が集い、津波などの災害から命を守るために、自分たちに何ができるかを議論されています。国土交通省では学校における防災教育の支援を推進していますが、その狙いは、さまざまなことを学んだ子どもたちから家庭に、そして地域へと、防災の知識や心構え等が浸透し、その地域に住む方々が持つべき備えを文化として広めたいというところにあります。

本日お集まりの高校生の皆さまは、今回のサミットで議論され、学ばれたことを各地域に持ち帰り、防災への心構えを地域で共有するときの核となる方だと思えます。2日間の議論の成果が世界各地で生かされ、「防災意識社会」が世界中に浸透することを祈念いたします。

## 9. 来賓挨拶



浮島 智子

文部科学副大臣

皆さま、こんにちは。ただ今、御紹介いただきました、文部科学副大臣兼東京オリンピック・パラリンピック担当内閣府副大臣の浮島智子です。

この度、国内外から多くの高校生の参加を得て、「世界津波の日」2018高校生サミットin和歌山が、ここ、私の大好きな和歌山の地で開催できますことを、心から大変うれしく思っております。

「世界津波の日」の創設者である自民党二階幹事長に心より感謝を申し上げさせていただくとともに、本サミットの開催に御尽力されました、和歌山県の仁坂知事、広川町の西岡町長をはじめ、国連国際防災戦略事務局、各国大使、また多くの関係者の皆さまに、心よりお礼を申し上げます。大変ありがとうございます。

安政の津波から復興の歴史と、今に残る広村堤防などの「防災遺産」は、我が国における防災文化の縮図として、ここを訪れる人々に深い感銘を与えているところでございます。

文化庁において、東京オリンピック・パラリンピックまでに「日本遺産」を100件認定することを目指し、これまでに67件を認定しております。その中で、平成30年度に認定されたのが、この「稲むらの火の館」をはじめとする「防災遺産」であり、「防災遺産」としては、日本で初めて「日本遺産」に認定されたところでございます。

私もこの「日本遺産」の認定を受けて、先日、広川町で開催されたシンポジウムに参加させていただきました。そこで「稲むらの火の館」、町並み、堤防等々を視察させていただき、本当にしっかりとした対策をしていくことが重要であるということを改めて認識をさせていただいたところでございます。

私は昨日、皆さまとともに、各国の皆さまの踊りや歌を聞かせていただき、また本日は朝9時半から始まったグループディスカッションで、いろいろなグループを訪ね、皆さまの意見交換の状況を視察させていただきました。

そこで、10時から全員で避難訓練をするということでしたけれども、緊急地震速報が鳴った途端、一瞬のうちに皆さまが机の下に潜って、こんな広い会場なのにもかかわらず、物音一つせず、しんと静まり返った風景を見て、本当に素晴らしい訓練であったなと思ったところでございます。

今日はこの2階にも和歌山県下からたくさん的高校生が来られております。私は昨日、今日と、皆さまの様々な議論を聞かせていただき、この若い皆さま方が各国に帰って、ここ和歌山で結んだ友情、そして様々な意見交換、勉強されたこと、これを地域の皆さま、御家族の皆さま、そして学校の皆さま、いろいろな方々に伝えていただきたいと思っております。今日ここに参加されている高校生、この若い皆さまが心一つに、守れる命はしっかり守る、命を守っていこう、これを合い言葉に、世界中で活躍をしていただきたいと、心からお願いをさせていただきたいと思っております。

本日は大変におめでとうございます。

## 10. スタディーツアー報告 GROUP 1



Dinusha Lakmali

Sujatha Vidyalaya / スリランカ

皆さんこんにちは。私はスリランカ代表のDinusha Lakmaliです。この二日間のスタディーツアーについての意見や感想を述べたいと思います。

第一に、耐久高等学校の生徒が、私たちを歓迎してくれたことに感動しました。彼らは、私たちと同様出会えてうれしそうで、まるで興奮状態でした。歓迎式典では、私たちを温かく歓迎してくれました。クック諸島やサモアの代表による美しいパフォーマンスはとても楽しいものでした。次に、和歌山県立たちばな支援学校から海外参加者への記念品の贈呈がありました。海外参加者と和歌山県の高校生の温かい交流を持つことができました。その後、海外からの代表はグループに分かれてクラス交流に向かいました。

その日の後半、私たちは湯浅伝統的建造物群保存地区を訪問し、そこで醤油博物館を見学し、醤油の造り方を知りました。私たち全員にとって新しい経験でした。次に、人々が公共浴場を楽しんだという甚風呂を見学し、日本の伝統文化について学びました。次の訪問先では、広小学校の児童の熱狂的な歓迎を受けました。

次に、稲むらの火の館を訪問しました。そこで、濱口梧陵の英断について3D動画を見ました。それは、生ける神と言われた濱口梧陵が、稲むらに火をつけてどうやって人々を救ったかを物語ったものでした。他に短いフィルムを見ましたが、それは、いつか災害が起きた時、まず自分自身を守ろうというメッセージを伝えていました。一日かけて、濱口梧陵「生ける神」の偉大さを知りました。

翌日の初めは、全ての参加者が串本駅に向かいました。そこで、串本古座高等学校の生徒が出迎えてくれました。私たち全員、特急電車に乗ることができ、全員が電車での移動を楽しみ、感激しました。高校生の案内による、橋杭岩や津波防災対策についての学習は分かりやすく楽しいものでした。電車での避難ハシゴ体験は目新しく、「鉄學」と呼ばれていました。こういう避難訓練をしたことはなく、全く新しい体験で、全力で訓練に参加しました。来るべき災害から自分たち自身で避難をするという体験をしました。素晴らしい試みだと思いました。

新宮駅に到着して、訓練についてのアンケートに答えた後、和歌山県土砂災害啓発センターを見学し、高度な技術で侵食がどのようにして防げるかを学習しました。最後に、美しい熊野大社を訪れ、心を奪われるような美しい景色を楽しみました。このように私たちのツアーは、濱口梧陵と津波避難訓練に重要をおいた有意義なものでした。この二日間にわたる様々な活動や経験を通じて、このサミットでの私たちの目的である濱口梧陵と防災についての知識を得ることができ、また、日本の人々や素晴らしい文化により深く触れることができました。

ご清聴ありがとうございました。

## 10. スタディーツアー報告 GROUP 2



Allen Jay Lamdrik

Laura High School / マーシャル

こんにちは。私はAllen Jay Lamdrikです。マーシャル諸島から来ました。グループ2のスタディーツアーの報告をする機会を与えられ、光栄で大変うれしく思います。津波に対する備えについて、最初に濱口梧陵の稲むらの火祭りについて述べたいと思います。私たちも参加した稲むらの火祭りでは、日本人が、多くの命を救うための勇敢な行動を評価していることを知りました。私たちは皆、濱口梧陵の話を知っています。この町の多くの人が敬意を表し、祭りに参加している様子に感動しました。それは、稲むらに火をつけて高台に人々を導いた英雄的な行動だけではなく、将来の津波から村人を守るために堤防を築くという彼の勇気ある努力を評価しているからです。私も彼のようにでありたいと思います。

次に、災害の軽減についてです。日高高等学校が、地震や津波のような災害にいかに準備しているかが印象に残りました。警報や避難誘導にすばやく対応していました。小さい小学生までそのような災害に備えていました。建物のより高い所に避難するのが唯一賢い指示ですが、母国の私の学校の一番高いフロアは、2階だけなのです。

次は道成寺で、このツアーから得るところが多くありました。道成寺では、多くの人々がアジアの彫刻を保存してきたことを知りました。文化財である千手観音像や他の多くの国宝が、いまだにそのまま残っています。道成寺に参詣に来た僧の安珍を殺した清姫の伝説を、住職が詳しく説明してくれました。この伝説から私が思ったことは、女性と男性、そして日本と他国の協調でした。

美浜町の避難高台では、かまどとして使えるベンチやマンホールトイレなどの工夫された発明の中でも、とりわけ倉庫のコンテナが設置され、津波のような緊急事態に備えているということが気に入りました。毛布、食料、水、トイレが2000人分、二日間分準備されていました。この避難高台に着いて見下ろした時、自分の町のことを思い、もし津波が私の町を襲ったらどうなるだろうと考えました。近い将来、もし私が幸運にも母国の大統領になることがあったら、この旅で学んだことを全て実践してみようと思います。

どうもありがとうございました。

## 11. 分科会グループ

分科会1：災害について知識を得る						
No.	グループ	参加国・参加都道府県	参加校名	参加人数	備考	
1	A	岩手県	学校法人龍澤学館 盛岡中央高等学校	3		
2		静岡県	静岡県立裾野高等学校	2		
3		京都府	学校法人立命館 立命館高等学校	3		
4		中国	Cuiying Middle School of Jimo Qingdao	10		
5		キリバス	King George The fifth and Elaine Bernacchi School	5		
6		パプアニューギニア	Port Moresby National High School	5	司会校	
7		パラグアイ	Colegio Japonés Paraguayo	5		
8	B	埼玉県	埼玉県立不動岡高等学校	2		
9		神奈川県	横浜市立横浜サイエンスフロンティア高等学校	2		
10		大阪府	学校法人大阪学園 大阪高等学校	3		
11		クック諸島	Tereora College Nukutere College Titikaveka College Papaaroa Adventish School	5		
12		ギリシア	2ND GENERAL LYCEUM AGGELOS SIKELIANOS	5	司会校	
13		ラオス	Vientiane high School	5		
14		メキシコ	University of guerrero	5		
15		ナウル	Nauru Secondary School	5		
16		C	高知県	高知県立清水高等学校	3	
17			東京都	東京学芸大学附属国際中等教育学校	3	
18	和歌山県		和歌山県立耐久高等学校	4		
19	高知県		高知県立嶺北高等学校	2		
20	インドネシア		SMAN 2 Banda Aceh	10	司会校	
21	トンガ		Tonga High School	5		
22	トルコ		ISTANBUL ATATURK HIGH SCHOOL OF SCIENCE	5		

## 分科会2：災害に備え知識を高める

No.	グループ名	参加国・参加都道府県	参加校名	参加人数	備考	
23	D	岩手県	岩手県立宮古工業高等学校	3		
24		大阪府	学校法人創価学園 関西創価高等学校	3		
25		和歌山県	和歌山県立串本古座高等学校	3		
26		愛媛県	愛媛県立宇和島東高等学校	2		
27		マレーシア	Sekolah Menengah Sains Tengku Muhammad Faris Petra	5		
28		マーシャル	Laura High School	5		
29		大韓民国	Incheon Daegun High School	4		
30		ベネズエラ	COLEGIO SAN JOSE HH MARISTAS	5	司会校	
31		E	宮城県	宮城県多賀城高等学校	3	
32			和歌山県	和歌山県立橋本高等学校	3	司会校
33	兵庫県		神戸大学附属中等教育学校	3		
34	北海道		北海道浦河高等学校	3		
35	アルゼンチン		Normal School "Juan Garcia de Cossio"	5		
36	ブルネイ		Maktab Duli Pengiran Muda Al-Muhtadee Billah College	5		
37	スペイン		IES Belén	5		
38	F		大阪府	大阪教育大学附属高等学校平野校舎	3	
39		和歌山県	智辯学園和歌山高等学校	3		
40		高知県	高知県立中村高等学校	2	司会校	
41		愛媛県	愛媛県立西条高等学校	3		
42		カンボジア	KEO POSH	5		
43		ポルトガル	Escola Secundária Ferreira Dias Agulva-Sintra	5		
44		スリランカ	Rahula College Sujatha Vidyalaya Richimond College, Galle	5		
45		ツバル	Motufoua Secondary School	5		
46		G	静岡県	静岡県立池新田高等学校	2	
47	大阪府		大阪府立西成高等学校	2		
48	高知県		学校法人土佐塾学園 土佐塾高等学校	2		
49	大分県		大分県立佐伯鶴城高等学校	3		
50	福岡県		学校法人コンプレガシオン・ド・ノートルダム 明治学園中学校・高等学校	4		
51	ミクロネシア		Outer Islands High School	5		
52	パラオ		Palau Mission Academy	5		
53	ペルー		Colegio Mixto Público Nacional Callao	5	司会校	
54	タイ		Koh yao wittaya school	5		
55	H	東京都	学校法人富士見丘学園 富士見丘中学校高等学校	2		
56		和歌山県	和歌山県立日高高等学校	3	司会校	
57		岡山県	岡山県立井原高等学校	3		
58		広島県	広島県立広島中学校・広島高等学校	2		
59		高知県	学校法人明德義塾 明德義塾高等学校	3		
60		チリ	Colegio Arica College	5		
61		デンマーク	Rysensteen Gymnasium	5		
62		モルジブ	Ahmadhiyya International School Center for Higher Secondary Education Billabong High International School	5		
63		ベトナム	Yen Hoa Cau Giay	5		

### 分科会3：災害から生き抜く

No.	グループ名	参加国・参加都道府県	参加校名	参加人数	備考	
64	I	岩手県	岩手県立釜石高等学校	2		
65		栃木県	栃木県立佐野高等学校	1		
66		和歌山県	和歌山県立新宮高等学校	2		
67		奈良県	奈良県立畝傍高等学校	3	司会校	
68		熊本県	熊本県立天草高等学校	3		
69		コモロ	Said Mohamed Cheik Le Phare Mougini Baraka	5		
70		ミャンマー	No.2 Basic Education High School, Laputta	5		
71		ニュージーランド	Heretaunga College Upper Hutt College	5		
72		バヌアツ	Central School	5		
73		J	北海道	学校法人札幌日本大学学園 札幌日本大学高等学校	3	司会校
74	和歌山県		和歌山県立海南高等学校	3		
75	徳島県		徳島県立城南高等学校	3		
76	熊本県		熊本県立済々黌高等学校	2		
77	フィリピン		Bienvenido Guillera Celebre National High School	4		
78	サモア		St. Mary's College	5		
79	シンガポール		Temasek Junior College	5		
80	米国		WAI'ANAE HIGH SCHOOL	5		
81	K		千葉県	千葉市立稲毛高等学校	3	
82			宮城県	宮城県仙台第一高等学校	3	
83		和歌山県	和歌山県立星林高等学校	3	司会校	
84		兵庫県	兵庫県立舞子高等学校	2		
85		カナダ	Alberni District Secondary School	5		
86		フィジー	Koro Island High School	5		
87		モンゴル	Mongolian-Russian Joint School Primary, Middle and High School No.6 of skhubaatar district in Ulaanbaatar	5		
88		ニウエ	Niue High School	5		
89		L	大阪府	学校法人関西学院 関西学院千里国際高等部	3	
90			兵庫県	兵庫県立尼崎小田高等学校	4	
91	和歌山県		和歌山県立田辺高等学校	2		
92	奈良県		学校法人西大和学園 西大和学園中学校・高等学校	3	司会校	
93	オーストラリア		Broome Senior High School	5		
94	ブラジル		School for Basic Education Professor João Widemann	5		
95	ネパール		Mahendrodaya Secondary School Madi Secondary School Sahid Smriti Awasiya Secondary School Janata Secondary School Laligurans Batika Secondary School Motherland School	5		
96	ソロモン		White River Community High school	5		

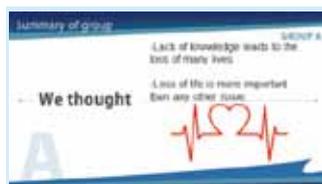
## 12. 分科会報告

### グループ A

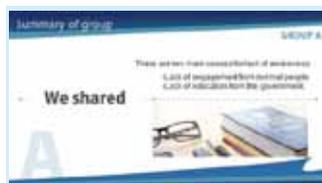


	参加国・参加都道府県	参加校名
国内参加校	岩手県	学校法人龍澤学館 盛岡中央高等学校
	静岡県	静岡県立裾野高等学校
	京都府	学校法人立命館 立命館高等学校
海外参加校	中国	Cuiying Middle School of Jimo Qingdao
	キリバス	King George The fifth and Elaine Bernacchi School
	パプアニューギニア	Port Moresby National High School
	パラグアイ	Colegio Japonés Paraguayo

### 分科会報告

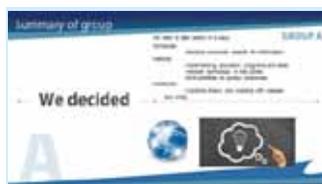


① 知識不足が多くの人々の命を失うことにつながり、そのことが一番重要な問題だと考えた。



② 災害への認識不足には主に以下の2つの原因があることを共有した。

- ・一般の人々が防災活動等に関心がないこと
- ・国をあげての教育がなされていないこと



③ 以下のことが必要であり、実現のために活動していこうと思う。

- ・世界中のみんなが信頼できる情報を得られるウェブサイトが必要である
- ・防災情報に係る技術の改善、SNSの利用
- ・防災についての教育プログラムやテストを実施
- ・授業や防災訓練をとおして、理論と実践をつなぐ

(分科会で、各校がアクションプランを発表し、ディスカッションで意見集約をしたうえで、分科会報告を行いました。また、各分科会の報告を集約・検討し、「稲むらの火 継承宣言」として採択しました。)

## 学校法人龍澤学館 盛岡中央高等学校

---

### 命の灯火、もう消さない!

人々の意識を高め、将来の災害被害を最小化する。

実際に被害を経験した人々や、過去の災害から学ぶ。

海岸地域に住む人々は危険を意識しているが、少しの被害しか経験しなかった人々は必然的に災害に対する意識が低い。そこで、私たちが作ったリーフレットを通して、災害に対する意識を高めたいと考えた。

## 静岡県立裾野高等学校

---

### 高校生にできること

- 1) 案内板を作る  
イラスト付き。SNSやウェブサイトで広める。
- 2) 災害時の避難方法を示したマップを作る  
このマップは観光客向け案内地図、または新しい観光スポットを示した地図にもなる。
- 3) 高校生を集めて、津波被害を防ぐためのいくつかのイベントを開催する  
街の住民と意見交換を行う。

## 学校法人立命館 立命館高等学校

---

### 子供に自然災害について興味・知識を与える

小学校、中学校で共通の災害教育を行い、全国規模の防災試験を行う。試験では目標を設定し、つまり、何年生がどの級の試験を受けるかを定める。試験内容については、過去の災害からの教訓や基本的防災知識を問う。試験を受ける前に、児童・生徒には防災に関する授業を行う（例えば、NHK for Schoolの「学ぼうBOSAI」や TEAM防災ジャパンの防災教育コンテンツを活用）。また、ソーシャルメディアに関する問いも含める必要がある。

## Cuiying Middle School of Jimo Qingdao

---

### 中国の典型的な自然災害から学び過去の災害の教訓を伝え災害と直に向き合う

津波とその他の災害について学んだことで、災害の無慈悲さと、いかに迅速な対応が必要なのかということに気があった。学生の私たちも、自分たちに出来ることに取り組むべきである。災害について学び、その学びを身近な友人達や家族に広めていくべきである。同時に、学校や地域社会が行う防災訓練に真剣に取り組む、確かな災害対策を掴む必要がある。また、防災と減災に関し何か良い提案がある場合は、地域社会や政府に申し入れるべきである。

災害への取り組みは長い道のりである。一人の力は弱くとも、皆で力を合わせれば、自然災害をも乗り越えていくことが出来るのではないだろうか。

## King George The fifth and Elaine Bernacchi School

---

### 津波に関する知識

津波やその影響について十分に理解することが何故適切かということについて、2009年キリバスの最初の津波警報の実際の例を使って、津波に対する理解不足が引き起こす事態を、例を挙げて説明します。

## Port Moresby National High School

---

### パプアニューギニアにおける自然災害

1998年に起きた津波は、村人にとってどんな津波も大きな危険をはらんでいることを示した。脆弱な避難経路と特殊な海底の形から、この地域で発生した津波は、沿岸をめぐって増幅するということが露呈したからだ。深根性で耐塩性の木を植えることで、同海岸およびパプアニューギニア沿岸の津波を予防することができる。

現在のパプアニューギニアにおける津波の安全対策には、すべての人が津波警報の存在、および、警報が鳴ったらどう行動したらよいを理解していること。さらには、沿岸の住宅やコミュニティが、津波を念頭に建てられることが盛り込まれるべきである。

## Colegio Japonés Paraguayo

---

### 安全・防災・教育

3つの柱（安全、防災、学校での教育）を軸に行動し、それを発展させることによって、洪水の影響を最も受ける地域の意識向上キャンペーンを実施する。さらに、生徒たちが地震活動のある国に旅行する可能性が高いことを踏まえ、私たちのアクションプランでは、補足として旅行中の防災に関する教育も行う。最終的には安全を確保するために避難訓練やシミュレーションを行う。また、緊急時の指示を示したパンフレットを生徒に配布する。

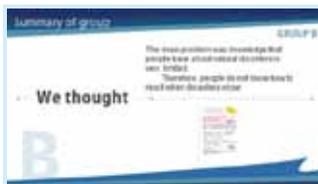
## 12. 分科会報告

### グループ B

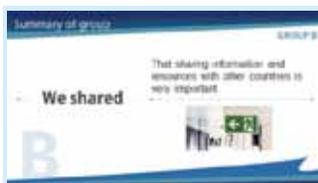


	参加国・参加都道府県	参加校名
国内参加校	埼玉県	埼玉県立不動岡高等学校
	神奈川県	横浜市立横浜サイエンスフロンティア高等学校
	大阪府	学校法人大阪学園 大阪高等学校
海外参加校	クック諸島	Tereora College / Nukutere College / Titikaveka College / Papaaroa Adventish School
	ギリシア	2ND GENERAL LYCEUM AGGELOS SIKELIANOS
	ラオス	Vientiane high School
	メキシコ	University of guerrero
	ナウル	Nauru Secondary School

### 分科会報告



- ① 自然災害について人々が持っている知識が限られていて、災害発生時にどのように行動すべきか知らないことが主な問題だと考えた。



- ② 他国と情報や資源を共有することがとても大切だということを知った。もし、多くの情報を得られたら、正しい行動ができるからだ。



- ③ 国レベルで人々に災害について知らせ、避難所を備えることが大切である。また、人々が食料・衣料・水などを準備したりする余裕を持つために早い段階で警戒を呼びかけるべきだと思う。

## 埼玉県立不動岡高等学校

---

### ハザードマップを利用した学校防災教育

ハザードマップに関する知識を得るために、ハザードマップで危険エリアと示された地区の住民は避難訓練への積極的な参加が必要。緊急時訓練の計画では、住民にとって積極的に参加しやすく、関心を引く内容に工夫する。改良点を3つ示す。

避難に必要な時間を短くする。目標を明確に示し、避難行動の意味を人々にもっと深く理解してもらう。避難後に質疑応答の時間を設ける。

## 横浜市立横浜サイエンスフロンティア高等学校

---

### 堀を活用した防潮堤の検討

#### 2011年東北地方太平洋沖地震は南海トラフの深部低周波微動活動に影響を与えたのか？

堀を用いた津波防波堤モデルの有効性を検証し、津波の被害を軽減するより効果的な対策を学園祭等で発表、今日の学びを共有する。

地震のメカニズムは解明されたものの、現在の科学の力では、地震の発生を予知することはできない。学園祭やその他のイベント等で、地震は直ぐに来るものではないので、地震や津波に備えることはできるといふこと、その重要性を説明していきたい。

## 学校法人大阪学園 大阪高等学校

---

### 高校生を動かす

今回大阪で起きた地震では大きな被害が比較的少なくて済んだ。

理由の一つは、多くの学校が休校にしたこと。

熊本県を襲った熊本地震では、本震の前に前震が起き、避難などの対応の遅れによって大きな被害に至った。

この事例を踏まえ、今回の大地震では、多くの学校が生徒の安全のために休校となった。

このようにして、過去に起きた地震をよく知ることによって、正しい対策を取ることができる。その結果、大きな被害から人々を守ることができた。

こうした教訓から、「地震に対してどのくらい備えられるかは、地震についてどのくらい知っているかに比例している」ことを学んだ。

従って、より多くの人々が災害に対する正しい知識を持てるコミュニティにする必要があると思う。

地震の被害を受けた街に住んでいる高校生が中心となって話し合う場があるコミュニティをつくることができる。

そして、コミュニティで話し合った内容をSNSを使ってより多くの人に発信することができる。

## Tereora College / Nukutere College / Titikaveka College / Papaaroa Adventist School

---

### 復旧・復興に向けて

学生（学校）

各生徒が自分の学校の災害プラン（サイクロンや津波が起きた時、どう行動して、どこに避難するか）を学び、グループセッションで共有する。教室内の生徒たちの目につく場所に災害プランを掲示し、毎学期にサイクロンや津波向けの避難訓練を実施する。生徒たちにサイクロンや津波の脅威を伝え、くるかもしれない日のために備えることの重要性を伝えていく。

学生（地域）

自分が住んでいる地域の災害プラン（どう行動して、どこに避難するか）を学ぶ。近所に誰が住んでいるか、避難経路を把握しておく。地元の避難訓練に参加する。

## 2ND GENERAL LYCEUM AGGELOS SIKELIANOS

---

### 災害に関する知識

ここで学んだことを活かして、自然災害によるダメージを最小限にするために、災害に関する理解を推進していく。

## Vientiane high School

---

### ラオスにおける災害に関する知識

洪水が起きた場合、地区の役人たちは携帯電話または地域の連絡網を使ってそれぞれの村に伝達しなければならない。暴風が起きた場合、人々は災害に備えて自分たちの身を守らなくてはならない。そのために、関連機関や学生がボランティアとして人々にアドバイスしたり、災害に対処するべく人々を教育したりすることができる。学校では、私たちは全クラスを回り、避難時に持つべき物について話をする計画を立てたが、まずは、彼らが自分たち自身の身を守ることができるように教育しなくてはならない。洪水が予想される時は、生徒達は屋上等の高い場所へと避難するべきであり、水の中を歩いて渡ったりせずに、注意深く救助を待つべきである。さらに、アドバイスするだけでなく、模擬訓練を行う機会を作ることで、より生徒たちの記憶に残る防災教育にすることができる。これらのプランを実施するために私たちが新しい知識を得ることで、その知識を国のたくさんの人々に広めることが出来、それが人々を災害に対し備えることへと導いてくれることを期待する。

## University of guerrero

---

### 災害から命を守る～「稲むらの火」発祥の地、和歌山で濱口梧陵の精神を共に学ぶ

災害に関する重要事項を人々に知ってもらうため、街同士で助け、支え合う。災害が起きた場合に悲劇を防ぐ方法、自分を含め人々の安全を守るためにすべきこと、パスポートや出生証明書などの重要書類を安全な場所に保管して守る方法について、どうすべきか資料を読む。

## Nauru Secondary School

---

### 津波・地震等のような自然災害について理解し、知識を深める

人々が自然災害の知識を身につけられるよう、ナウル共和国で「災害知識調査」を実施。高齢者にも若者にも配布した。

## 12. 分科会報告



	参加国・参加都道府県	参加校名
国内参加校	高知県	高知県立清水高等学校
	東京都	東京学芸大学附属国際中等教育学校
	和歌山県	和歌山県立耐久高等学校
	高知県	高知県立嶺北高等学校
海外参加校	インドネシア	SMAN 2 Banda Aceh
	トンガ	Tonga High School
	トルコ	ISTANBUL ATATURK HIGH SCHOOL OF SCIENCE

### 分科会報告



① 厳しい災害が頻発する地域にある国が多く、災害によって人命が失われたり、建物など大きな被害を受け、復興・復旧が難しい。また、経済的にも大きなダメージを受けることが問題だと考えた。



② 防災への興味・関心の不足は、知識不足につながる。多くの国には、研究機関や教育機関が少なく、災害時、状況を見極め、正しい判断を行うためには、そういった機関が必要であることを共有した。



③ 防災について知識を共有することは重要である。そのために、学校で災害を啓発するクラブをつくり、次のような活動を行ってほしいと思う。

- ・ 防災についての科目を必須科目として取り入れるよう学校に要望
- ・ 災害関連施設の見学
- ・ 災害啓発のための歌のコンテストや展示会
- ・ SNSの活用
- ・ 後輩たちへの防災についての講和 など

## 高知県立清水高等学校

---

### 私たちの地域で想定される災害

1. 避難場所として選ばれている山の土壌の性質を調べる。
2. 現在ある埋立地を調査し、過去に土地がどのように埋め立てられたのか調べる。
3. 縮小モデルを使って、影響が及ぶさまざまなエリアの災害をシミュレーションする。
4. 防潮堤の建設など、防災対策を取り入れる。防潮堤は東北の被災地を訪れた時に知った。
5. 山に避難する危険性を全員に周知する。
6. 防災委員会が上記1～5番について清水高校でレクチャーを行う。映像を使って災害のシミュレーションを行い、災害からどう身を守るか人々の意識を高める。避難の大切さを教え、PowerPointを使って津波の危険性を伝える。

## 東京学芸大学附属国際中等教育学校

---

### 私たちの学校の防災意識を高めるために

私たちはなぜ災害に対してあまり注意を払わないのか。それはおそらく、避難訓練の時を除いて災害について考える機会がほとんどないから。ということは、この問題の解決方法として最も効果的な方法は、生徒たちが学校での防災情報を他の生徒たちに主観的に伝える基盤を作ることである。このための具体的アクションプランリストを示す。

インタビューやイベント参加によって防災について学ぶ。生徒に向けて防災情報を定期的に発信する（学校の公式メール、学校だよりを使って）。ワークショップやイベントを開催する。

これらの活動を推進することによって、生徒たちが防災に関わる機会が増え、意識向上につながる。

## 和歌山県立耐久高等学校

---

### 百世の安堵～過去から現在・未来へ～

私たちのアクションプランは、地震を身近に体験できる動画を作成し、意識と知識を高めることである。動画制作では、視聴者が見て、考えたくなるよう配慮する。

視聴者が積極的に参加できる内容にする。東日本大震災と、予測されている南海トラフ地震の事例を踏まえ、視聴者には2つの選択肢を示す。最も適切な行動を選ばなければならない。その後、その結果を示す。これによって正しい知識と判断を高めることができる。また、災害の現実を目のあたりにすることもできる。

動画は、どの年齢の人にとっても意味のある内容にしなければならない。高齢者の避難からSNSを使った防災までさまざまな点を取り上げる。私たちの狙いは、ユニバーサル防災に対する知識と意識を育むことである。また濱口梧陵の例から学んだ教訓も取り入れる。

動画を見る前に、防災知識と意識について調査を行う。見た後に、同じ調査を行う。これによって、視聴者が自分自身の変化に気付くことができる。私たちにとってとても有益な方法だと思う。

## 高知県立嶺北高等学校

---

### 未来へ進む

#### 1 防災時の非常食“Reihokotto”の開発

昨年の活動で開発したレシピ（かぼちゃの植付けと育成、サンプル作成、味の改善、試食会、レシピ完成）を使って、非常食の製造会社に協力をお願いし、“Reihokotto”を開発した。

#### 2 非常食として“Joubi-sai”の提案

日頃の防災の意識を高めるために、“Joubi-sai”と呼ばれる非常食を提案する。庭の片隅で植付け、栽培、収穫した作物を、緊急時の非常食として保存するというサイクルを繰り返す。

学校の文化祭で、紙芝居を使って“Joubi-sai”を紹介し、観客が自宅で栽培できるようにジャガイモの種を配布した。9月に行われた避難訓練の後、中学生および高校生向けに防災のレクチャーを行なった。その際にも“Joubi-sai”について紹介し、“Reihokotto”の試食会をすると同時に、参加者にジャガイモの種を配布した。

## SMAN 2 Banda Aceh

### 津波の知識：知る価値はあるのか？

校内で津波に関する展示を行う。展示は生徒が構成を考える。津波に関する知識が十分構築されていないので、展示は年に1度の学校行事、「Banta Muda祭り」で行う。この行事を通じて、作文や作詞などのコンテストを行う。作文コンテストは十代、作詞コンテストは小学生を応募の対象とする。歌詞には津波の情報を含める。次に、展示場所に情報提供テーブルを置き、世界で起きている津波に関するチラシやパンフレットを配布する。これに加えて、津波アンバサダーとして、私たちがアチェ津波博物館などの施設で行われる学校外の展示に参加する。アチェ津波博物館は、アチェの中で最も多くの観光客が訪れる場所の一つであり、若者アンバサダーとして博物館と協力する。博物館が施設を用意し、私たちがボランティアとして施設に立ち、来館者に津波の知識を説明する。

## Tonga High School

### 災害を生き抜くために知識こそが最も重要である

私たちができることは、私たちの世代の命を現在と将来にわたって守ること。私たちは3つのアクションプランを考えた。1つ目は、コミュニティが自然災害に関する知識をもっと身につけるためのプログラムを実施する。2つ目は、互いの協力と援助国との協力により、政府機関とのつながりを強める。3つ目は、今後の自然災害に十分備えるため、定期的な避難訓練の実施を人々に呼びかける。

## ISTANBUL ATATURK HIGH SCHOOL OF SCIENCE

### 防災意識とは災害を心配することだけではなく、次世代に災害について伝えていくことや地震災害を分析し減災対策もしなければならない

地震がトルコに大きな被害をもたらしたために、さまざまな重要な措置が講じられている。地震に耐える強度を持たない建築物は再建築され、国の救助団体には資金が援助され、学生達は国に起こりうる災害と、その災害が起きた際に取りべき行動について学んでいる。『地震が人々を殺すのではなく、建築物が殺すのだ』という、有名な引用句は皆知っている。

私たちは、小学生達に地震について教えるために、プレゼンテーションをすることにした。このプレゼンテーションでは、世界各地や私たちの国で起きた災害、特に地震に関する一般的な情報や、1999年に起きた地震を経験した人々へのインタビュー、また破壊を軽減するための政府の動きについて触れるつもりである。

## 12. 分科会報告

### グループ D



	参加国・参加都道府県	参加校名
国内参加校	岩手県	岩手県立宮古工業高等学校
	大阪府	学校法人創価学園 関西創価高等学校
	和歌山県	和歌山県立串本古座高等学校
	愛媛県	愛媛県立宇和島東高等学校
海外参加校	マレーシア	Sekolah Menengah Sains Tengku Muhammad Faris Petra
	マーシャル	Laura High School
	大韓民国	Incheon Daegun High School
	ベネズエラ	COLEGIO SAN JOSE HH MARISTAS

### 分科会報告

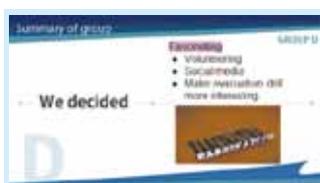


① 防災について意識することが大切だと考えた。



② 以下の理由で、避難訓練や災害に関する教育に真面目に参加しない若者が多いことに問題があるということを共有した。

- ・ 訓練内容に興味を持ってない
- ・ 主体的に参加者が関わるプログラムではない
- ・ 災害を経験したことがないので当事者意識がない



③ ボランティア活動や、避難訓練をより楽しんで取り組めるものにする。

- ・ 高校生ボランティアが幼稚園に訪問し、ゲームを通して防災活動を行う
- ・ SNS等を利用し、ティーンエイジャー向けに、防災に関する啓発活動を行う（ポスター、ビデオ、歌など）
- ・ リアリティのある避難訓練を行う（想定外のシミュレーションや音響効果を導入）

## 岩手県立宮古工業高等学校

### 疑似津波実演における災害啓蒙活動

過去に三陸海岸を襲った災害の経験から、地理的条件について考える。地理的条件によって、必要な避難のタイミングは異なると考える。地理的条件に基づいた防災意識と津波についてのプレゼンテーションを、多くの学校および様々なイベント等で発表していく。

## 学校法人創価学園 関西創価高等学校

### 常に注意をする！

アクションプランを立て、その中のいくつかを実行した。

テーマは「ABC」とした。「Always Be Careful (常に注意する)」を意味する。災害の状況にどう対応するかを紹介した防災ソングを作った。災害経験者にインタビューを行った。防災に関する私たちの計画や活動を推進するために学校の朝礼で何度か発表する機会を得た。災害時に役立つ数種類のカードを作成し、個人情報や緊急時の連絡先を書くための欄を設けた。携帯しやすいよう折りたたむことができる。まだ実行はしていないが、計画していることは、学校周辺地域の調査。私たちの学校は山の高台にある。地震や豪雨が起きると土砂崩れの危険がある。災害時に特に危険な箇所を突き止め、ポスターを作成し、生徒たちの目に付きやすい複数の場所に貼る（教室、靴箱、ロッカーの壁など）。

## 和歌山県立串本古座高等学校

### 防災意識を高めるために

防災意識を高めるための方法を考え出す。私たちの地域の私たちの世代は津波の経験がなく、そのために全体として深刻さが欠けている。だからこそ、高校生たちに自主的な地域参加を勧め、自分たちの命の大切さを考えることを強く促したい。

地域にとってわかりやすい避難訓練の実施を提案する。例えば、地元の人たちが私たちの学校で行われる避難訓練に参加し、定期的に最悪のケースでの生存訓練を行う。また、食料供給などに関するHUGトレーニングや、段ボールを使ったパーティション設営トレーニングなどを行う。避難訓練を退屈に感じない内容に工夫する。

大きな問題の一つは、串本町のハザードマップを見たことがない生徒の割合が高いことだと思う。串本古座高校の生徒たちにハザードマップを確認してもらおう。例えば、ハザードマップに音声や動画を加える。この工夫によって、身体障害者や小さな子供も情報を得ることができる。地元の人たちにハザードマップを見てもらうための方法も考えようと思う。

## 愛媛県立宇和島東高等学校

### 宇和島東高校および宇和島文京地区の防災力向上への取組

1. 過去5年間の津波・災害対策に関する問題について、数多くの調査を行った。年度末に私たちの学校で行われたスーパーサイエンスハイスクール（SSH）調査結果ミーティングのほか、愛媛県内外を含むさまざまな会議で発表し、防災意識の向上に貢献した。
2. 宇和島市文京町周辺には6つの学校（明倫幼稚園、明倫小学校、鶴島小学校、城南中学校、宇和島南中等教育学校、宇和島東高等学校）がある。私たちはこれまで、巨大地震などの災害時の小さな子供や児童など（約3,000人）の避難対策について学び、話し合いを行ってきた。各学校の避難計画に基づき、小さな子供や児童・生徒のための避難経路や避難場所に関する具体的な話し合いや相談を約半年にわたって行ってきた。そして、学校での避難訓練を行った。今後、避難計画の効果を改善するとともに、訓練中の問題や課題などを確認する。

## Sekolah Menengah Sains Tengku Muhammad Faris Petra

### 意識することが持続可能な備えにつながる

政府の意識向上の取り組みを支援するため、高校生として互いに協力する必要がある。「津波災害意識月間」キャンペーンの実施は、災害時に物理的、精神的に備える方法を注意喚起する一つの方策となる。これは、クイズや、津波に関する短い物語コンテスト、津波に関する映像の視聴など、学校での活動によって行うことができる。国際バカロレア（IB）ワールドスクールとして、私たちはマレーシアの他のIB学校と関係性やつながりがある。そのため、私たちには津波に対する警戒を周囲の学校に広める責任がある。ユネスコ政府間海洋学委員会と協力して私たちの学校の避難計画に注意を向け、その手段として自然災害に関する話をし、命を守るために取るべき行動を教える。教師と生徒が将来の災害を意識するようになる。最後に、学校便りに津波に関する情報を載せる。学校便りには、学校の自然災害に関するウェブサイトへのリンクも掲載する。そうすれば生徒たちがさらに多くの情報を得ることができる。また、災害時の非常用キットの使い方について、毎月の特集記事も掲載する。

## Laura High School

---

### 災害—高波を知り、備える

ラウラの地域住民に向けた、津波に対するアクションプランを作成。最初のステップは、公共の場所（コミュニティセンター等）や商店にパンフレットを設置すること。地方自治体の議員に相談して、地域の活動で津波について啓発していくことにした。

## Incheon Daegun High School

---

### 世帯による防災の備えと地域間の防災情報の交換の欠如

私たちは3つのステップを計画し、練習した。1つ目のステップは関心。生徒たちに災害に関心を持ってもらうために、毎日の昼食時間に2つの災害映画を見せた。2つ目のステップは学習。生徒たちに関心を持ってもらった後に学習段階を設け、災害について学べるようにした。イメージ学習スタジアムを運営し、生徒たちが災害とはどのようなものか、災害にどう備え、どう対応すべきかを学べるようにした。3つ目のステップは参加。生徒と教師が防災に参加できるよう世界フォーラムを開催し、災害について自由な話し合いを行った。例えば、私たちのチームメートは、PowerPointを使って学校での災害対応の問題点について議論した。

## COLEGIO SAN JOSE HH MARISTAS

---

### 災害を知り、備える

各建物の避難計画を作成し、地震が起きた際に建物の中にいる人たちがどうしたらいいか、どの出口を使ったらいいかを明確にする。市民の間で災害グループを立ち上げ、日頃の普及活動や災害時に指揮を取れるようにしておく（訓練、聞き取り調査など）。災害時に必要な情報を掲載したパンフレットの配布を通して、災害への備えを推進する。家庭の情報など、緊急対策に必要な情報を記入する用紙を市民に配布。学校・仕事場・家庭における避難計画に沿った避難訓練。自然災害が起きた場合にどうしたらよいかを紹介するウェブサイトの作成。自然災害が起きた際に、最新の情報を市民に発信することのできるソーシャルメディアのアカウントを作成する。

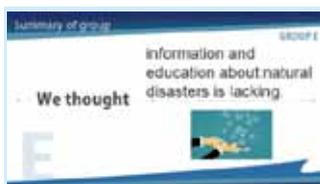
## 12. 分科会報告

### グループ E



	参加国・参加都道府県	参加校名
国内参加校	宮城県	宮城県多賀城高等学校
	和歌山県	和歌山県立橋本高等学校
	兵庫県	神戸大学附属中等教育学校
	北海道	北海道浦河高等学校
海外参加校	アルゼンチン	Normal School "Juan Garcia de Cossio"
	ブルネイ	Maktab Duli Pengiran Muda Al-Muhtadee Billah College
	スペイン	IES Belén

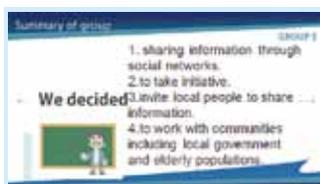
### 分科会報告



① 自然災害についての情報や教育が十分でないと考えた。



② 情報を提供し、避難訓練をすることで自然災害から生き延びる方法について共有した。例えば、生徒会を組織し、安全対策のハンドブックを配布するなど。



③ 以下のことをしていこうと思う。

- ・ ソーシャルネットワークをとおして、情報共有すること
- ・ イニシアチブをとること
- ・ 地域の人々と情報を共有すること
- ・ 年配の方々、地域の行政を含むコミュニティと連携し活動すること

## 宮城県多賀城高等学校

### 多賀城高校生ができること

他の県や他国を襲った津波の脅威から学んだ、人命救助に関する教訓を伝えていくために、津波のサインを用いた町歩きを強化していく。

まずは、歌または詩碑を使って、様々な意見を交換する。歌や詩は、一見、災害とは関係ないと思われるかもしれないが、防災の意識を高めるためには有効かもしれない。その観点からも、外部の人に町に来てもらい、彼ら意見に耳を傾け、自分たちが住む町を新たな視点で捉えてみたい。次に、多賀城の魅力をアピールする。多賀城には、歌や詩碑を始めとする、多くの歴史的魅力がある。□コミなどを通して、より多くの人に多賀城を訪れてもらい、防災に関する教訓を直接的または間接的に伝えていきたい。今回の分科会およびサミットの参加を通して、他の学校の試みを学び、自分たちの実践に活かしていきたい。

## 和歌山県立橋本高等学校

### 避難訓練の重要性

「防災週間」を設ける必要があると思う。例えば、

・月曜日～水曜日

午前中：通常授業

午後：ワークショップ（1時間）

3日のうちどこかで、時間や場所を知らせない抜き打ち避難訓練を実施する。

・木曜日

午前中：通常授業

午後：再度避難訓練を実施。生徒たちが体育館に集合した教師や近隣住民の前で避難所の設営を行う。

・金曜日

1、2時間目：避難所の整理整頓

3、4時間目：近隣住民とのコミュニケーション

5、6時間目：振り返りとプレゼンテーションの準備

7時間目：プレゼンテーション

避難訓練は授業中だけでなく、休憩時間や放課後にも行う必要がある。またどう行動するか学ぶために月1度の実施が必要。

そして、私たちが考えた防災のための「LOVE」と、避難のための「4つのD」

Learn disasters（災害について学ぶ）

Opportunity of talking with family（家族と話し合いの機会を設ける）

Visible decisions（はっきりわかる判断をする）

Evacuation drill（避難訓練を行う）

Don't run.（走らない）

Don't push people.（押さない）

Don't return.（引き返さない）

Don't make noise.（騒ぎ立てない）

防災のためには、避難訓練が一番重要だと思う。

## 神戸大学附属中等教育学校

---

### これらの災害にいかに備えるか

アクションプランは、ソーシャルメディアの活用と、教師が生徒にどう行動すべきか指示を送ることができるよう学校の公式LINEアカウントを作ること。2つ目は、生徒たちが地震が起きた時にどう行動すべきか知り、理解するためのもっと実践的な避難訓練を行うこと。私たちの学校では毎年数回の避難訓練を行っているが、地震の危険性を学ぶ機会は多くない。3つ目は、コミュニティと学校。私たちの学校は住宅地にあるためコミュニティと学校とのつながりが大切だが、今はそれがないので、防災について一緒に学ぶための地域の意見交換会を開き、私たちの学校が避難所としてどう機能するのか情報を広める必要があると思う。最後に、3つ目のポイントと関連するが、学校が避難所になった場合に生徒たちが何をすべきかを教えること。例えば、場所案内や毛布・食料などの物資配布の手伝いなど。

## 北海道浦河高等学校

---

### 真冬の避難所を準備する

- ・ 真冬に避難訓練を実施する。
- ・ 外国人向けにイラスト入りの掲示板を立て、避難所で不安なく生活するための情報を提供する。
- ・ 避難所運営ゲームを英語に翻訳し、避難所運営方法を外国人と話し合う。
- ・ 避難所での必需品リストを作成し、住民に配布する。
- ・ 地域の医療施設や福祉施設に「JINRIKI」を用意しておく。

※ 「JINRIKI」は、雪道などの危険な道路で車椅子を簡単に牽引できる補助装置

## Normal School “Juan Garcia de Cossio”

### 「洪水の後に何が起こるのか」：地域社会のための調査

私たちの学校では、消防局と病院の理事長との会合を企画し、同意書に署名をしてもらうということを考えた。その同意書とは、この2つの機関が、大災害が起きた後の地域社会のために（避難、安否確認、避難所の運営、復興再建への取り組み）、協力して働くという内容のものである。さらに、洪水が社会や環境へもたらす影響を少なくするためのプランを立てるために、ボランティア団体（生徒や保護者、先生方やその他一般の方々による）をつくることを考えた。そのプランは例えば、危険性の高い地域においてリーダーを育てることで地域社会の中での生徒たちの意識を高めることや、学校を訪ねて子供たちや若者たちに大災害に直面した際に取りべき行動の基本的なルールについて教えること、また地域医療に影響を与えるような計画が実施される際に、機関間の協調性や結びつきを強めることを狙いとする報告書を書くことなどである。

## Maktab Duli Pengiran Muda Al-Muhtadee Billah College

### 災害を知り、備える（学校・家庭での減災方法、災害への意識向上、避難訓練等）

#### 1. コミュニティベースの災害リスク管理

コミュニティと地元自治体からの参加を促し、自分たちの環境の中で想定されるリスクの特定、分析、対処、モニタリング、評価を行うことを目的とする。これによって自分たちで考えた解決策を実行する力が身につく。村の幹部が自分たちのアクションプラン、人口データシート、ハザードマップ対策、土地利用区域割り（例えば、低地の沿岸から100メートル圏内は住居・建物を建設しないなど）を作成し、津波の最初の衝撃を吸収するための防波堤、防潮堤、密な木立を整備する。

#### 2. 学校防災プログラム

生徒たちに、学校をより安全な場所にするための備えや解決策の検討など簡単で実践的なアクティビティを教える。児童全員に水に浮かび続けるための基本的知識（泳力）を身につけさせることも非常に有益。そのために、初等教育の学校カリキュラムに組み込む。

#### 3. 大規模警報伝達システムの構築

携帯電話番号を通じて全員に送られる情報付き自動警報は、一般市民に幅広く伝達するために役立つ。警報には適切な避難方法情報を添え、ある段階から次の段階に効率的、円滑に移れるようにする。

## IES Belén

### アンダルシアの津波の危険性、マラガにおける「稲むらの火」の精神

アンダルシア地方及びマラガ海岸における津波のリスクについて学んだ。また、政府の災害対策計画について学んだり、津波に関する講義を受けたりした。これらのアクションプランは、私たちの学校でマラガ大学によって実施されました。同時に、マラガ大学理学部の津波HySEA プログラムを通して、同学部のEDANYAグループによって開発された津波シミュレーションシステムについても詳しく学んだ。今回学んだ稲むらの火の精神を受け継ぎ、濱口梧陵の教えをマラガにも広めてゆきたい。

私たちはこの他にも、次に挙げる様々なプランも実行することができると思う。

例えば、私たちの学校に、洪水発生時の緊急避難計画を提案することが出来る。また、私たちの街に住む人々と、私たちが津波について学んだこと、例えば次に記す様な情報を共有することが出来る。混乱を起こすことなく人々の意識を高めるためには、

- ・マラガの様々なメディアに記事を送る
- ・テクノロジー技術 (YouTube channel) や、様々なソーシャルネットワーク (Twitter and Instagram) を使う
- ・アンダルシア地方の教育省に、マラガ地方の高校に限定をせず、州内の他の地域の高校でも津波防災に関する講義を行うことを提案する

等のアクションを起こすことが出来る。

## 12. 分科会報告

### グループ F



	参加国・参加都道府県	参加校名
国内参加校	大阪府	大阪教育大学附属高等学校平野校舎
	和歌山県	智辯学園和歌山高等学校
	高知県	高知県立中村高等学校
	愛媛県	愛媛県立西条高等学校
海外参加校	カンボジア	KEO POSH
	ポルトガル	Escola Secundária Ferreira Dias Agulva-Sintra
	スリランカ	Rahula College / Sujatha Vidyalaya / Richmond College, Galle
	ツバル	Motufoua Secondary School

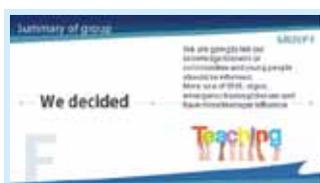
### 分科会報告



- ① 若者が地震や津波のリスクについてよく知らないことから、災害の予防と対策が欠けていると考えた。



- ② 災害は国・地域によって様々であり、その災害についての関心や知識が不足していることを共有した。



- ③ 自分たちが得た知識を地域の人々や、若者たちに伝えていく。そして、SNSや標識の活用、避難訓練や防災に関する授業を行うことによって、10代の若者にさらに影響を与え防災意識を高めていくつもりだ。

## 大阪教育大学附属高等学校平野校舎

---

### これからの防災訓練のあり方～カエルキャラバンの事例を通じて～

アクションプランとして、カエルキャラバンを改良することを地域の避難訓練として提案する。このカエルキャラバンには、高校生達が企画した、大人向けのブースと子供向けのブースがある。このプログラムの内容は、子供達にはもちろんのこと、大人達にも容易に実行することが出来るものである。そしてもう一つ、移動型の避難訓練も提案する。これは、地域の避難訓練に参加することの出来ない老人ホームのお年寄り達のための企画である。

同じような内容の避難訓練を年に何度か実施することを提案する。訓練を1年のうちに何回か行うことで、その内容の重要性について、おもちゃ目当てに集まる子供達に伝えることができる。何回も訓練を行うことによって、災害が起きた際には、子供たちは避難訓練中に行ったゲームを覚えているだろうし、予定が合わなくて訓練に参加できないという場合にも次の機会を持つことが出来る。これらのことから、連続して避難訓練を実施するためのシステムを作り上げることが必要だと考える。

## 智辯学園和歌山高等学校

---

### 高校生へのアンケート（内容：ハザードマップの認知度と利用）

ハザードマップの認知度アップのためにSNSを活用する。

例：Twitter、Instagram、YouTube (YouTuber)

高齢者向け講習

例：高齢者介護施設での避難訓練

## 高知県立中村高等学校

---

### 正しく恐れるために～私たちだからできること～

学校外で

**主なアクションプラン：**小学校、中学校を継続的に訪問し、クイズを交えながら防災講習を行う

**その他のプラン：**私たちの学校のキャラクター、「カワボー」と活動する

→ 災害に関する啓蒙ビデオを制作し、駅やスーパーマーケットなどさまざまな団体の協力を得て、四万十市全体で放映する。

また、そのためにTwitterも活用する。

学校内で

**主なアクションプラン：**校内で防災講習を行う

→ 生徒を対象にした防災講習を行う。

生徒会メンバーと防災団体がレクチャーする。

自分たちの知識を共有し、それについて話し合う。

**その他のプラン：**避難所マニュアル英語版を作成する。

→ 日本人と、四万十市で暮らしたり、この街を訪れる外国人のために避難所マニュアル英語版を作成した。

幡多地域内の駅や学校にこのマニュアルを置いてもらえるよう依頼する。

## 愛媛県立西条高等学校

---

### 私たちの住む西条市の防災・減災対策について

「防災人」についてもっと知り、自分たちに何ができるかをもっと深く学ぶ。西条ハザードマップに基づき、さまざまな状況での避難タイミングや避難経路を確認する。西条市が運営する防災アプリを活用し、ピアールする。DIG、HUGなどの防災対策ゲームによってシミュレーションを行い、そこから防災に関するさまざまな知識を得る。SNSを活用する。

## KEO POSH

### 安全な学校と地域社会のために日々災害に備える

世界津波の日に参加し、生徒たちで計画を立てる。

- ・ KEO POSH高校の他の生徒たちや地域住民にこの体験を受け継ぐ
- ・ 他校の生徒たちや他の共同体・地区の人々に受け継ぐ
- ・ 自分たちの学校、他の学校で災害運営訓練を続ける

## Escola Secundária Ferreira Dias Agulva-Sintra

### 今日の行動が未来の鍵だ

津波が発生した際にどんなことが起こるのかということシミュレーションすることは可能である。生徒達は地方政府と協力して、津波に関する知識や認識または自分自身の命を守る方法を発信する。実際の避難バッグを使って、各家庭での避難バッグの作り方を実演する。

後輩達のために火災や地震のシミュレーションを行い、危険や混乱を最小化するため、また集団で災害に対応するためのスキルの改善を図り、それを共有する。サイズミックプラットフォーム (Seismic Platform) は、地震シミュレーションのために使われた。人が台に上がって地震を体感する装置であり、起こり得る危険をより精密に模擬するために、テーブルと発泡スチロールの骨組みがあった。シスモボックス (SismoBox) は、建築物内での地震波の動きをシミュレーションするものである。このプレゼンテーションの中で、生徒達と聴衆との交流を図ることが出来る。これは、地震学のプロジェクトに人々の興味を惹きつけるためのクリエイティブな方法である。

フェレイラディアス校には、即時に地震の波形を共有することのできる地震計がある。この装置は、科学的側面から見ても素晴らしい装置であり、また学校のウェブサイトやソーシャルメディアで地震波形を共有することで、リスク軽減への取り組みを発展させることにも貢献している。

このプロジェクトの目的は、新しい生徒達を魅了することで、彼らから刺激をもらい、また彼ら自身がプロジェクトに変化をもたらしていけるようになることである。

## Rahula College / Sujatha Vidyalaya / Richmond College, Galle

---

### 災害について意識を高め、避難用品を備える

私たちは、校内の生徒達の中からランダムにグループを選出した。そして、彼らが避難用品についての知識をどれだけ持っているのかを問うアンケートを作成し、そのアンケートから得られたデータに沿って、避難用品を備えることの重要性や、その具体的な内容、またそれをどこに置いておくべきかということ、写真と共に説明するリーフレットを作成した。そして彼らにそのリーフレットを配った後、それぞれに避難用品を準備してもらった。例えば、大切な書類や、缶詰食、水、応急手当用品、ラジオ、毛布、懐中電灯、家庭用蓄電池等を含むものである。さらに、実際に彼らの用意した避難用品の写真を撮って持ってきってもらった。

たとえ近い未来に避難用品を使うようなことがなくとも、私たちにはこの母なる自然を予見することは出来ない。避難用品は、安全な場所に保管しておけば、いつまでも長持ちするものなので、いざという時のために備えておくのは良いことだと考える。

## Motufoua Secondary School

---

### 減災への意識向上と備えをすすめるのは私たちだ

サミットに参加する他の国の代表から、災害の備えや防災について学ぶ。サミットでの学びを、学校のみならずと共有する。ラジオの防災番組を通して、学生として災害に備える心得を国の子供たちと共有する。私たちの学校の一部の学生が、数年かけて気象情報等を取得する機器の使い方を学ぶ。2019年内に、私たちの学校における津波の避難計画に着手する。津波やサイクロンが発生したときの、生徒たちの避難経路や集合場所を確認して提示する。2019年内に、災害に関する学内看板や掲示板を作成する。また、学生向けの津波避難訓練を行う。ツバル国立災害対策委員会と協力して、学生たちが災害について学ぶ適切な教育プログラムを提供していく。

## 12. 分科会報告

### グループ G



	参加国・参加都道府県	参加校名
国内参加校	静岡県	静岡県立池新田高等学校
	大阪府	大阪府立西成高等学校
	高知県	学校法人土佐塾学園 土佐塾高等学校
	大分県	大分県立佐伯鶴城高等学校
	福岡県	学校法人コングレガシオン・ド・ノートルダム 明治学園中学校・高等学校
海外参加校	ミクロネシア	Outer Islands High School
	パラオ	Palau Mission Academy
	ペルー	Colegio Mixto Público Nacional Callao
	タイ	Koh yao wittaya school

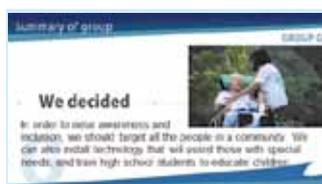
### 分科会報告



- ① 防災に対する意識の低さが一番の問題であると考えた。そして、防災意識の低さが引き起こす問題は以下の内容であると考えた。
- ・ 防災対策の不足
  - ・ 避難計画作成に関する問題
  - ・ 国民の緊急事態への対処法に対する意識の欠如



- ② 人々が津波を主な脅威として考えていないことや、国は常に地域のことやその必要なものについて考えているわけではないことを共有した。



- ③ 地域のすべての人々を巻き込んで、防災意識を高めていく。また、特別な配慮が必要な人々を助けるための技術を取得し、さらに子供たちに防災について伝えていくつもりだ。

## 静岡県立池新田高等学校

---

### ハザードマップで私たちの街を救え！

ハザードマップを外国人や高齢者に配慮したユニバーサルハザードマップに改良する必要があると思う。私たちの高校に外国語を話せる生徒がいるので、新しいハザードマップを作ることができる。それがあれば、みんなが避難場所に急いで逃げることができる。また、今のハザードマップの内容は具体的すぎてすぐにはわかりにくい。二次災害によって一部の道路が使えなくなるかもしれない。通行できる可能性が高い道路をリストアップしてマップに加え、避難訓練の際に住民に周知する必要がある。また、補充物資が届かない可能性を考え、御前崎市が始めた「防災用品購入費補助金交付制度」を今後全国規模に広め、防災用品を準備しておく。これが徹底されれば、支援者だけに頼ることなく避難所生活を送ることができると思う。御前崎市は学校と密接に協力し、地域活性化のために少なくとも月に1度、「スクラムグッドマナーあいさつ運動」を行っている。御前崎市との強力なつながりを活用し、私たちの調査内容を市民の皆さんに知らせたい。

## 大阪府立西成高等学校

---

### 南海トラフ地震に対する新しい避難計画

従来の避難計画を見直し、地元住民も西成高校に避難できる新しい計画を学校に提案した。9月5日は、大阪880万人訓練の日であり、新しい計画に従って、学校で避難訓練を行った。当日は、つながりを強めるために地域住民にも参加を呼び掛けた。

## 学校法人土佐塾学園 土佐塾高等学校

---

### 生徒各自が「マイ・ハザードマップ」を作り、災害への意識を高める

目標は、誰もがどこにいても避難ができるようになること。オンライン上でアクセス可能な大分県のハザードマップを基に、各生徒が自分の「マイ・ハザードマップ」を作成することを提案する。「マイ・ハザードマップ」には、津波の浸水危険区域、津波が到着するかもしれない予想時間、最寄りの避難所までのルートが含まれる。一連の情報は比較的たやすく手に入れることができるので、各生徒には自分の家近隣だけでなく、自分が普段からよくいく場所のハザードマップを作ることすすめていく。

学生は、学生主体の教育からより多くの事を学ぶと思う。自分の学校に戻ったら、ここで学んだ事を共有する授業を行い、災害に関する知識を学生たちが積極的に学ぶ場を提供したい。

## 大分県立佐伯鶴城高等学校

### 夜間安全に避難するための照明

ユニバーサルデザインの避難指示を路上に示すための3種類の色つき標識を提案する。子供、高齢者、文化の異なる外国人、障害者にもわかりやすいデザインにする。

夜間は標識が見えにくくなるため、建物屋上に大型照明を設置し、光を照らして、予測された津波の高さに応じて安全に避難できる場所を示す。

もう一つ、光とともにスモークが出るようにする。スモークに含まれる多数の粒子が照明の光に反射し、照明が光照らしている遠方の場所がはっきりとわかる。

また、照明と併せて指向性スピーカーを設置する。目が不自由な人を避難場所までの正しい方向へと導き、また、災害の現在の状況を伝える。

## 学校法人コングレガシオン・ド・ノートルダム 明治学園中学校・高等学校

### 内陸地震の脅威と防災・減災意識向上のための啓発活動

災害に対する意識を広めるため、これまでよりも幅の広い2つのイベントを計画した。1つ目は小学生向けの啓蒙活動。この活動を行うことによって家族の中で防災意識が共有され、その結果、具体的な行動が促され、影響が広まることになる。

2つ目は高校生向け防災シンポジウム。シンポジウムでは、講習とパネルディスカッションを行った。生徒たちが自然災害について学び、「自助」の精神を養った。この他、他校の高校生たちとのつながりを築き、私たちのメッセージをさまざまな人々と共有する機会を作った。これが「相互扶助」の意識を広める助けになると思う。

こうした取り組みによって、高校生が自助と相互扶助に貢献できる。地元自治体の方々と「公的支援」の役割についても話し合い、私たちは、北九州エリアの地域防災力の向上に役立てると思う。

次の段階では、被災地を訪れる予定。他校の生徒たちと熊本の仮設住宅を訪問する計画を立てている。これによって防災をさらに深く理解できると思う。

## Outer Islands High School

### 災害によりサンゴ環礁は影響を受けやすいので、予防策を知り、災害リスクを軽減する

世界津波の日高校生サミットに参加後、自分たちの学校に戻って、津波に関する4つの防災ワークショップを実施する。

1. 津波に備えた防災準備
2. 津波が起きたときの防災ガイドラインに沿った行動とは
3. 津波が起きたら（緊急対応）
4. 津波の避難訓練

参加者たちは、同じワークショップをウルシー環礁にある学校でも行うことにした。地元の緊急対策チームと協力して、津波防災ユニットを立ち上げ、トレーニングを行う。津波防災ユニットの年間を通じた活動を支援し維持していくために、州政府または国から予算を獲得するように試みる。

## Palau Mission Academy

### 知識を広める：パラオにおける津波と地震安全教育

私たちのアクションプランは、パラオの一般市民（特に私たちのような高校生たち）の間で、国の津波安全対策の内容に対する認識を高めることである。コミュニティでの意識向上と防災のために次の方法を考えている。

1. トレーニングを受けた高校生が、小学校を訪れ、津波や地震に関する意識と対策について説明する。
2. 津波と地震に関する基本的意識と安全について説明する1～2分の公共広告ビデオを制作し、地元テレビ局とソーシャルメディア（YouTube, Facebook, Instagram）で流す。
3. 津波・地震に関する情報をテーマにした全校ポスターコンテストを行う。ポスターには次の情報などを載せる。
  - ・ 津波・地震に関する基本的事実
  - ・ 災害時の行動
  - ・ 津波到来を示す可能性のある徴候
  - ・ 津波安全圏を示す標識
  - ・ 避難経路

## Colegio Mixto Público Nacional Callao

---

### 地震や津波の危機管理計画に高校生が参加することの重要性

防災計画への有効なアクションとして、学校をターゲットにしたキャンペーンや特別イベントの開催を考えた。彼らが学校で学んだことを家族や親戚に広めることで、より多くの人々が、地震や津波の危機管理計画に高校生が参加することの重要性を理解すると思う。

## Koh yao wittaya school

---

### 学校と家庭における減災対策

#### 学校

津波についての教育普及。津波がきたらどうしたらよいかをみんなが理解することで、特に低学年児童の不安や恐怖を払拭する。適切なメディアを使って災害について教える。子供たちは、家に帰ってから災害について学んだことを保護者に伝える。津波に関する緊急対策を作成し、低学年および障害のある生徒に配慮した避難訓練を行う。

#### 地域コミュニティ

自分の家が津波危険区域または災害危険区域であるかどうかを確認し、避難計画について知る。避難経路に沿った避難訓練の実施。地域内で緊急計画を用意し、住民に周知する。津波が発生した際の避難マップを作成し、周知共有する。2004年の津波以降、タイでは災害への意識が高まった。サテーン、トラン、クラブ、パンガー、プーケット、ラノーンの6つの県を始めとする地域住民は、津波について学んでおり、今後もし津波がくることがあれば、より被害が拡散しない措置をとることができるだろう。

## 12. 分科会報告

### グループ H



	参加国・参加都道府県	参加校名
国内参加校	東京都	学校法人富士見丘学園 富士見丘中学校高等学校
	和歌山県	和歌山県立日高高等学校
	岡山県	岡山県立井原高等学校
	広島県	広島県立広島中学校・広島高等学校
	高知県	学校法人明德義塾 明德義塾高等学校
海外参加校	チリ	Colegio Arica College
	デンマーク	Rysensteen Gymnasium
	モルジブ	Ahmadhiyya International School / Center for Higher Secondary Education / Billabong High International School
	ベトナム	Yen Hoa / Cau Giay

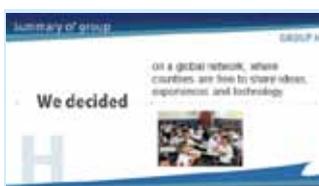
### 分科会報告



- ① 世界中の自然災害に関する問題を解決するカギは、教育と熱意だと考えた。



- ② 避難訓練や教育を効果的なものにするために、お互いの国の知識を伝えあい、地域の経験や情報を共有することが大切だと共有した。



- ③ 国レベルでネットワークを築き、世界中の人々とアイデアや経験、技術を共有していく必要がある。また、民間レベルでの連携も必要である。

## 学校法人富士見丘学園 富士見丘中学校高等学校

---

### 東京オリンピックにむけて、言語に頼らない防災対策

1. 世界中の人にわかりやすい地震の早期警報のデザインを提案する。いくつかのデザイン案を提示し、様々な国の人に長所と短所の聞き取りをする。
2. 映像やクイズを通して、学生たちにデザインを普及させる。
3. 2の映像をいくつかの言語に翻訳し、YouTube を通して世界に発信。デザインを普及させる。

## 和歌山県立日高高等学校

---

### 高校生がつなげ、広げる防災のわ(環・和)

#### “津波と防災ネットワークin和歌山”を構築する

##### メンバー

- ① 和歌山の津波と防災ネットワークに興味のある高校生
- ② 和歌山の津波と防災ネットワークに興味のある高校教員
- ③ 地方自治体の代表
- ④ 地元市民の代表
- ⑤ 顧問

##### 活動

- ① 津波や自然災害に関する情報やアイデアを、和歌山の高校生間で共有する
- ② 高校生、地元市民、地方自治体間関係を深める
- ③ 研究者の助言を得て、津波や防災について学習する
- ④ 「津波と防災ネットワークサミットin 和歌山」を開催する
- ⑤ ネットワークを、国内だけでなく国外にも拡大する

## 岡山県立井原高等学校

### 西日本豪雨の悲劇を繰り返さないために～高校生の地域防災～

悲劇を繰り返さないために、高校生として私たちができること

(1) 知識を得る = 災害を正しく恐れる

①総合学習の時間などを使って地域の防災対策を調べる。

(2) 知識を伝える = 危機意識を高め、正常性バイアスを取り除く

①総合学習の時間などを使い、地域防災対策について調べたことをクラスや学年ごとに発表する。

②防災週間などを設け、ハザードマップなどの防災情報を校内に掲示する

(3) 地域のために行動する = 自分と周囲の命を守る

①平時の活動

1) 高齢者介護施設や幼稚園で防災について説明する。

2) 高齢者介護施設や幼稚園を訪れ、最寄りの避難所までの経路を一緒に確認する。

3) 町内会などと協力し、高齢者や障害者など自宅近くに住む弱者を見つける。

②緊急時の活動

1) 自宅近くに住む弱者の方々に早めの避難を呼びかける。

2) 避難勧告が予想される場合は、自分の身を守ることを優先し、地元住民と一緒に避難をさらに呼びかける。

## 広島県立広島中学校・広島高等学校

### みんなで作ろう、洪水ハザードマップ

各地域で地元市民自らが、洪水の災害予測地図“e-Bousai Map”を作成する

目的：・地域固有の社会特性・災害特性・防災資源・防災上の問題点を明らかにし、災害を自分事として捉えられるようにする

- ・マップを作成する共同作業を通じて、地域住民間での絆を生む
- ・防災意識を高める

手順：①災害予測地図を作成したい学生を募る

②洪水に関する災害予測地図のコンテンツについて話し合う

③実際に地域を歩き、危険な場所や安全な場所をチェックする

④上記で確認した場所を地図にかき入れる。見やすくなるように注意する

⑤地元住民と一緒にワークショップを行い、フィードバックをもらう

⑥完成した地図を地域住民に配布する

⑦アンケートの実施

<アンケートの概要>

対象：プロジェクト参加者

質問：1. 洪水のリスクをより身近に感じられるようになりましたか？

2. 今回のプロジェクトは、洪水の被害を防ぐのに有効だと思いますか？

⑧アンケートの結果次第で、災害マップ作成プロジェクトを定期的実施する

## 学校法人明德義塾 明德義塾高等学校

### 言葉のバリアフリーから広がる防災活動

#### (1) 新しい防災カードの作成

防災カードを、留学生にもわかりやすいよう改良する。ふりがなを振り、表現を短くする。一部英語を併記する。イラストを改良する。耐水紙を使用する。中国語、タイ語、ベトナム語、韓国語、英語版を作成する。近隣宿泊施設と協力し、このカードを日本人、外国人に配布する。

#### (2) 防災パンフレットのデザイン

南海トラフ地震対策パンフレットについて。日常生活に基づき、詳しい情報を提供する。関心を引くような工夫をし、漫画や絵を加える。留学生にもわかりやすくし、漢字にはふりがなを振り、難しい言い回しを避ける。

#### (3) 中学生、1年目の留学生のための防災講習

高学年の生徒が他の生徒に通訳付きでわかりやすく説明する。講習前後で、留学生の意識調査を行う。高校での集会で防災カードを説明、配布する。

#### (4) 大阪府北部地震

6月の大阪府北部地震の際、地震予測に関する誤った情報が出回ったことによって多くの留学生が帰国した。これを踏まえ、数名の留学生を交えた話し合いの場を設けて何が正しい方法かを伝えるためのアイデアを考えた。

## Colegio Arica College

### 教科学習によって、災害への意識を高め防災対策を考える

自然災害を教科別に学ぶ。地理と歴史では過去の地震、科学では自然災害の専門的側面やその形成過程を取り上げる。芸術のクラスでは、防災・避難手順など学んだことを図で示す。有事の際に可能であれば助けられるよう応急手当も取り上げる。このように教科別にはっきりと分け、学校のカリキュラムに加えることによって、より有意義な形で学校内に浸透する。スクールカウンセリングクラスでは、応急手当の方法を専門に取り上げる。この演習は1年を通じて定期的、頻繁に行う必要があると思う。そのため、月に1度の開催を提案する。そうすれば、生徒たちの身につけ、多くの生徒が緊急時に正しく対応できる。中学2年生から高校3年生の生徒で緊急救援隊を結成し、月ごとにメンバー交代する。

最後に、避難標識を避難経路がはっきりとわかるような新しい独自のデザインに改良する必要がある。この新しい標識は全国に示し、広める必要がある。

## Rysenstein Gymnasium

---

### 災害に備え意識を高める

この調査と分析は、8月にデンマークのコペンハーゲンにあるライセンスティーンギムナジウム (Rysenstein Gymnasium) の生徒たちと協力して完成される。私たちのアクションプランは、火災に備えるための情報に、人々がより容易にアクセスするための方法に関するものである。

## Ahmadhiyya International School / Center for Higher Secondary Education / Billabong High International School

---

### 災害に備え意識を高める

高校生として、私たちは意識向上に直接的にも間接的にも貢献できる。同級生と防災について調査し、情報を共有することができる。また、各家庭に救急用品を備えるなど、家族に防災対策を勧めることもできる。

学校と政府の責任者に防災を教育カリキュラムに加え、津波避難訓練を実施するよう要望することによって、間接的に貢献できる。

このほか、全国規模の生徒組織を立ち上げ、災害意識向上プログラムを実施する。

これは、教育機関との協力によって実現できる。

長期的には、生徒会が月1度の説明会や、関心を維持するための活動を実施することができる。

## Yen Hoa / Cau Giay

---

### 災害への備え～我々の責任～

まず、生徒達はインターネットで情報を収集したり、災害を実演で学ぶために学校でのプログラムに参加したりして、自然災害について十分に理解する必要がある。

第二に生徒達には、正しい判断に基づいて、また適切な避難訓練に参加したりすることによって、緊急時のための備えを万全にしておくことが必要となる。

第三に生徒たちは、積極的に勉強したり、校内の安全対策に参加したり、また災害リスクを最小化するために行われるボランティア活動に参加したりするべきである。

地域社会は互いに協力して、早期警報を使って必要な情報を即時に広め共有しなくてはならない。

さらに、自然災害への対応法についてや、災害に対処出来る安全な学校やオフィスを建設するためのガイドラインについて教えるワークショップを企画することも重要である。災害予測、防災、自然災害への準備や対応に関するマルチメディアプログラムの開発を促進することも、災害に備える中で重要な役割を果たしている。

最後に、今回のような国際サミットを存分に活用してゆくことも大切である。それは、自然災害に備え対応する経験を共有するためであり、また自然災害によってもたらされる影響を最小限にする目的で実施される様々な手段によって未来のリーダーを育成するためである。

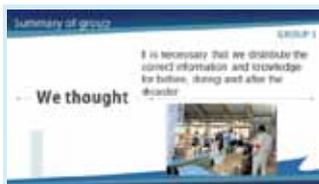
## 12. 分科会報告

### グループ



	参加国・参加都道府県	参加校名
国内参加校	岩手県	岩手県立釜石高等学校
	栃木県	栃木県立佐野高等学校
	和歌山県	和歌山県立新宮高等学校
	奈良県	奈良県立畝傍高等学校
	熊本県	熊本県立天草高等学校
海外参加校	コモロ	Said Mohamed Cheik / Le Phare / Mougini Baraka
	ミャンマー	No.2 Basic Education High School, Laputta
	ニュージーランド	Heretaunga College / Upper Hutt College
	バヌアツ	Central School

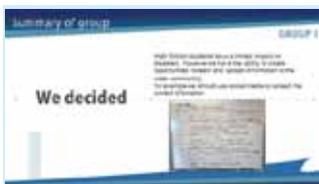
### 分科会報告



① 災害の発生前、災害発生時、災害の発生後、すべてにおいて、正しい情報や知識を伝えることが必要だと考えた。



② 防災訓練などの効果的な実施方法を知らないことが問題であり、人々が災害を生き延びる方法を学ぶ機会が多くないということを共有した。



③ 高校生は防災について限られた影響力しかないように思うが、地域の人々に情報を広めたり、学ぶ機会をつくり出したりすることができるので、メディア等を使いながら正しい情報を広めていくつもりだ。

## 岩手県立釜石高等学校

---

### 東日本大震災の光と影：津波への備えといのちの教育

#### 「釜石高校生とその保護者の防災意識向上」

「釜石高校生のための防災マップ」を作成し、生徒とその保護者に配布する。

防災マップでは、地震、津波、台風、豪雨などさまざまな災害時における危険箇所と避難所を示す。

釜石高校の生徒たちが、通学・下校途中、外出中などその時の状況によってどこに避難すべきか知る必要がある。

## 栃木県立佐野高等学校

---

### 災害を生き抜く

#### ・高校生からの積極的なコミュニケーション

一人暮らしの場合、気持ちが落ち込んだり、悲観的になりがち。高校生がコミュニケーションを図り、こうした人々を助けることができる。具体的には、避難所で高校生を含むグループを作り、レクリエーションを行う。被災地でのコミュニケーションを図る。

## 和歌山県立新宮高等学校

---

### 新宮における津波対策

1. 津波がどれほどの速さで到達し、それぞれの居住地域にどの程度の被害が及ぶかを示す。
2. 避難時の必需品と便利なものを紹介する。
3. さまざまな機会に避難訓練を行う必要性をアピールする。

## 奈良県立畝傍高等学校

---

### 畝高から発信するボランティアの薦め

- ①誰もがもっと気軽にボランティア活動に参加できるよう、各大学やNGOと協力しなければならない。
- ②高校生はボランティア団体についてもっと知る必要がある。
- ③被災地域のボランティアを確保するためのプロジェクトを率いる新しい組織を立ち上げる必要がある。  
この組織は、それぞれの被災地にボランティアを効率的に派遣し、ボランティア団体と被災地域の地元自治体との橋渡し役として機能できる能力が必要である。

## 熊本県立天草高等学校

### VR機器を活用した避難訓練及び避難所運営訓練について

#### [高齢者の避難]

高齢者向けアクションプランとして、仮想現実（VR）機器を使った避難体験がある。全方向カメラで避難訓練の撮影データを制作する。プログラムでは、危険なエリアやコンテンツが登場人物の具体的情報とともに表示される。仮想現実（VR）の活用には次のような利点がある。

自宅で避難訓練ができ、これまでよりも簡単。体の不自由な人の多くは避難訓練に不安を感じている。仮想現実（VR）機器を使って自宅で仮想現実の避難訓練を行うことによってこの問題を解決できる。通常の避難訓練は日中に行われるが、仮想現実（VR）機器なら夜間にも避難を体験できる。

#### [若者による支援]

若者たちが高齢者と接する機会を増やすために、廃校になった校舎を避難場所として使う運営トレーニングが有効だと思う。トレーニングは防災専門家の指導の下で行う。トレーニングを通じて、若者たちが高齢者のことをもっとよく知り、どのようにコミュニケーションを図るかを学ぶことができる。トレーニングは、若者たちがもっとリーダーシップを発揮する助けにもなる。

## Said Mohamed Cheik / Le Phare / Mougini Baraka

### 避難、安全確認、情報収集、避難所運営、復旧・復興等

- ・参加メンバーの災害リスクに関するスキルの向上
- ・カルタラ火山の唯一の観測所であるOvk を、いたずらや破壊行為から守る
- ・小学校および中学校における自然災害に関する教育プログラムの強化
- ・政府は防災に関する教育の重要性を理解し、特別関連プログラムを実施すべき
- ・世界津波の日高校生サミットで学んだ防災の大切さを地元の人々に伝える
- ・日本との良好な関係を築き、日本での教訓をコモロに活かし、将来起こるかもしれない危険を回避する

## No.2 Basic Education High School, Laputta

---

### 自然災害を生き抜く

- ・ 避難場所の周知（高台の場所、安全な避難場所）
- ・ 避難経路および避難場所の確認
- ・ 避難のための輸送手段やボート等の準備
- ・ 避難時のサバイバルスキルの獲得
- ・ 緊急対応（応急処置、非常駐車帯）
- ・ 医療手当（捜索、救助、ケガ人の搬送）
- ・ 情報の提供（適時）
- ・ 自立支援、より安全な家の再建
- ・ 市民同士の支え合い（歌、物語）
- ・ 復興プロセスにおける精神・社会的ケアの提供

## Heretaunga College / Upper Hutt College

---

### 真剣に津波を考える

- ・ 地域の全ての学校が、自然災害に対し十分に備えられていることを確実にする
- ・ 私たちの2つの学校の非常用品を補充するために寄付を募る
- ・ 2018年に行われる全国的なシェイクアウト（Nationwide Shake Out 2018）である、地震防災訓練及び津波避難訓練に学校で参加する
- ・ 例えばその7つの地域が破壊され孤立してしまった場合の最善の避難方法について地域の民間防災チームに相談をした後、このことについての学びを私たちの学校へ伝える

## Central School

---

### 災害を生き抜く

- ・ 教師やファシリテーターのための説明
- ・ バヌアツ全体の学校で行う意識向上プログラム
- ・ 全員を対象としたワークショップやセミナーの開催
- ・ 訓練 - 生徒向けの安全のためのスキルとルール
- ・ リスク軽減・防災資源地図の作成
- ・ 有事指揮系統、サイレン・アラーム
- ・ モニタリングと各コミュニティへの伝達
- ・ 計画 - 避難経路

## 12. 分科会報告

### グループ J

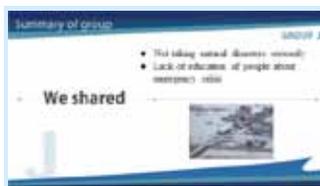


	参加国・参加都道府県	参加校名
国内参加校	北海道	学校法人札幌日本大学学園 札幌日本大学高等学校
	和歌山県	和歌山県立海南高等学校
	徳島県	徳島県立城南高等学校
	熊本県	熊本県立済々黌高等学校
海外参加校	フィリピン	Bienvenido Guillera Celebre National High School
	サモア	St. Mary's College
	シンガポール	Temasek Junior College
	米国	WAI'ANAE HIGH SCHOOL

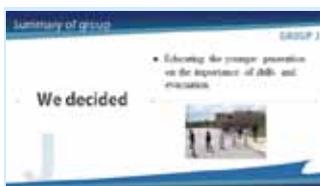
### 分科会報告



① 防災について、真剣に考えていないこととコミュニケーション不足が問題だと考えた。特に、子供たちが自然災害に無関心で避難訓練にも真剣に取り組んでいないことは、更に大きな問題につながる。



② 自然災害を真面目に考えていないこと、また、緊急事態について人々への教育が十分ではないということを共有した。



③ 若者に防災訓練や避難の大切さ、また濱口梧陵の偉業から学んだことを伝えていこうと思う。

## 学校法人札幌日本大学学園 札幌日本大学高等学校

### 災害を生き抜く～正しい情報と行動～

- ・ 安否確認する→そのためにSNSを使うべき  
避難指示に頼りすぎ→地域のハザードマップを活用する（ただし現在のハザードマップは改善が必要であると思う）
- ・ 高校生として学ぶべきこと  
→災害時にSNSをどう活用できるか。緊急時のSNS活用方法を考える。また、災害が実際に発生した時にSNSがどう使われたかも知る必要がある。  
→現在のハザードマップの短所を突き止め、地元住民がハザードマップについてどの程度知っているかを調査する。
- ・ 高校生ができること  
→自然災害が発生した時に誰もが見ることができる自治組織のウェブサイトを立ち上げる。  
→子供、高齢者を含め誰もがわかるハザードマップを作る。
- ・ これらをどう発信するか  
→地元住民にハザードマップを配布するための自治組織活動に参加する。

これらによって自助とコミュニティでの助け合いが可能になる。

## 和歌山県立海南高等学校

### 防災プランをうまく機能させるために

防災対策を機能させるためのポイントが3つある。個人が何をすべきか、地元自治体が何をすべきか、政府が何をすべきかである。

個人については、自らで避難判断をする。地元自治体は避難所運営訓練を定期的に行う必要がある。政府は再建支援を行う。

避難所では、さまざまな問題が起きる。特に、避難所で過ごす外国人被災者には言葉の壁がある。宗教やアレルギーを理由に避難所の配布食料に困る人もいる。避難所で健康的、安全に過ごすにはどうすべきか。それを考えることが大切だ。

## 徳島県立城南高等学校

---

### 貴重品を見つける

ICとアプリを使った製品を提案する。それぞれのICには番号が割り振られ、身の回りの貴重品にIC付きシールを貼る。その時に番号をアプリに登録する。技術進歩によって、ICを20メートル先からでも読み取れる機器がある。その技術を活用し、がれきなどの下に隠れた貴重品を検知する。ICシールが付いた品物を見つけた場合は、最寄りの避難所に届け出る。その避難所の人からICシールの情報をアプリに送信する。貴重品が見つかったメッセージが持ち主に届く。技術がさらに進歩すれば、シールに小型GPSを付けることもでき、詳しい位置情報を得られる。GPSには他者との情報共有を制限する機能を付け、持ち主がGPSを使用する時に本人のプライバシーが守られるようにする。まだまだ改善点がたくさんあり、高校生である私たちにとって技術的な側面は難しい。でももしこの問題をさまざまな観点から考えるならば、新しいアイデアを編み出せるのではないか。

## 熊本県立済々黉高等学校

---

### 二次被害～どのように災害を生き抜くか～

- ・「自己紹介カード」と呼ばれる「経歴書」を取り入れる。同じ趣味を持つ人同士がTwitterで自己紹介するために使う。また、「お願い情報カード」を作る。
- ・ SNSで広める（Twitterなど）
- ・ 「お願い情報カード」は、災害情報を細かく区分し、送ったり、受け取ったりできる。避難所で記入し、水、食料、危険な場所、安否確認などを知らせることができる。
- ・ 書式を決めることによって見やすく、パニック状態にあってもミスが起きにくくなる。情報を書き込んだ時刻がわかるので、新しい情報かそうでないかがわかる。  
\*データベース化（安否報告など）できれば、さらに効率的に活用できるかもしれない。

## Bienvenido Guillera Celebre National High School

---

### フィリピンのアクションプラン

1. 学校、家族合同の災害準備会議を行う。
2. 家庭や周辺でのリスクを特定する際に、全ての家庭に支援を与える。
3. 地震発生時の、家や各部屋での安全な場所を特定する。
4. 避難地域への脱出ルートを作る。
5. 再会計画を作成する。
6. 地域や学校で行われる防災対策企画や災害リスク軽減に関する活動に、両親も参加するように働きかける。

## St. Mary's College

---

### 災害を生き抜く～2009年のサモアの津波の事例研究～

高い脆弱性+低い対応能力=高い災害リスクの公式を、低い災害脆弱性+高い対応能力=低い災害リスクに転換する必要がある。脆弱性が高いのは、女性と子供、障害者、高齢者、病人、貧困者（安全で整った住居を確保する経済力がない）。

対応能力を築くには、コミュニティに共通する災害を学び、理解する必要がある。3つの共通災害とは、熱帯低気圧、地震、川の氾濫。

命を守り、過去の災害から学ぶために、若者としての私たちは次のアクションを提案する。

ハザードマップの作成（クレヨンなどを使う）、展示の開催（ポスター、スピーチ、詩）、リスク軽減対策の実施（ゴミ清掃、植樹）

## Temasek Junior College

---

### シンガポールにおける突発的な洪水

避難時の緊急事態に十分備えるために、高校生として次のことができる。

避難手順をシンガポールの人々に教育する。

- ・ ソーシャルメディア（Facebook、Instagramなど）を通じて必要な対策を一般市民に知らせる。自宅近くの避難場所・避難所の位置に関するチェックリストを作成する。チェックリストには、主な住宅地域近くの避難場所・避難所を掲載する。
- ・ 一部の人が曖昧に考えている鉄砲水の本当の怖さをポスターや広告を使って一般市民に教育することによって警戒を強化し、「MyWaters」などのこれに対応したアプリの幅広い利用を促す。
- ・ SNSでウェブサイトのリンクを送信し、シンガポールの人々に公益事業庁（PUB）ウェブサイトのチェックを促す。
- ・ シンガポール人同士で気配りや思いやりの気持ちを醸成する。そのためにそうした行為を実際に示す。そうすれば市民が、特に危機に際して互いに助け合うようになる。その結果、例えば、近所で互いに助け合い、近くの避難場所・避難所まで避難できる。これは素早い対応に大切であり、障害者にとっても非常に役立つ。

## WAI'ANAE HIGH SCHOOL

---

### ハワイにおいて災害を生き抜く

私たちのアクションプランは、コミュニティが最も必要としている情報を特定すること。通説と現実の違いを見極め、誤解があれば修正する。ファーマーズマーケットといった地域のイベントでパンフレットを配布したりインターネットで情報を発信して、災害時に有効な実践を紹介する。

## 12. 分科会報告

### グループ K



	参加国・参加都道府県	参加校名
国内参加校	千葉県	千葉市立稲毛高等学校
	宮城県	宮城県仙台第一高等学校
	和歌山県	和歌山県立星林高等学校
	兵庫県	兵庫県立舞子高等学校
海外参加校	カナダ	Alberni District Secondary School
	フィジー	Koro Island High School
	モンゴル	Mongolian-Russian Joint School / Primary, Middle and High School No.6 of skhubaatar district in Ulaanbaatar
	ニウエ	Niue High School

### 分科会報告



① 人々が自然災害に対して準備ができていないことと、知識が不足していることが問題だと考えた。そのため、災害への意識を高めるための教育を実施していこうと思う。



② 自然災害に対する備えを改善するために各国の経験や考えを共有した。そして、生き延びるためにより良い地図を作成することや、もっと教育を受けるなど、それぞれの国がしなければならないことを学んだ。



③ 地域の人々が自然災害を生き抜くための知識を持ち、備えていくために高校生としてできることをしていこうと思う。

## 千葉市立稲毛高等学校

---

### 新しいハザードマップ作成の提案

- ・新しいハザードマップを作成する
- ・避難場所の規模を検討する
- ・避難経路を示す
- ・ガイドラインの作成を提案する
- ・避難時の近隣住民への声掛けを促す
- ・避難場所までの道筋を示す

## 宮城県仙台第一高等学校

---

### 自分たちをアップデートしよう～本当に安全だと思っていますか～

過去に多くの津波を経験しているリアス式海岸地区で暮らす人々は、沖積平野の住民よりも津波に対する備えをしている。沖積平野の住民は津波に対する経験が十分でなく、正常性バイアスが状況をさらに悪化させた。この問題をすべての子供たちに教える必要がある。すべての子供が津波のメカニズムや人間が持つ心理的弱点を知っていなければならない。例えば、防災講習を計画し、小学生や中学生が津波が実際にどのようなものだったか、人々が実際にどう行動したかを学べるようにする。高校生が講習で使用する動画や冊子を作成することもでき、冊子は大人にも配布できる。本当の危険を知らなければ、正常性バイアスの影響を受ける。危険を正しく知ることによって、自分たちの命を守ることができる。

## 和歌山県立星林高等学校

---

### 私たちに任せて!～高校生が災害時に果たす役割とは～

各地域の防災マップを作成する。

防災マップを見れば、地域内の施設にどの程度の災害用食料備蓄やトイレがあるかわかる。また、避難所までの最も安全な経路も確認できる。

子供や高齢者のための緊急避難計画を立てる。

この仕組みを支えるために、計画は住民自治会と協力して立てる必要がある。

津波が発生した場合は星林高校に避難する。

ポスターやチラシを作成し、津波が発生した場合に校舎3階に避難できることを地域住民に知ってもらう。また、学園祭に地域住民を招き、3階を見てもらう。

共同避難訓練

地域の幼稚園、小学校、中学校、高校で共同避難訓練を行う必要がある。

## 兵庫県立舞子高等学校

### 人にやさしい避難所運営とは？平常時に私たちができること

2-7組（高校2年生に相当）は、「アクティブ防災」と名付けられた授業を受け、海外の災害や、子供たちのための基本的PFA（サイコロジカルファーストエイド：心理的応急処置）を学んでいる。

その次に、9つのグループに分かれて被災者に配慮した避難所を平時に準備しておくための方法を話し合い、グループごとにテーマを絞った（犯罪の防止、ペットの避難、トイレ、水の供給、高齢者、高校生、子供、妊娠女性、乳幼児とその母親）。どのグループも被災者と支援者の両側からテーマについて話し合い、短いプレゼンテーションを行った。その中のアイデアを一つ紹介する。

「子どもカード」

子どもカードは証明書。災害時には子どもは迷子になりやすく、大人の助けが必要になる。ただしこのカードは個人情報であるため、紛失し、見つからない場合重大なリスク要因になる。

## Alberni District Secondary School

### 「あの音は何？」 アルバーニでの2018年1月の津波避難訓練への人々の反応のまとめ

- 避難訓練計画を見直し、ポートアルバーニのすべての住民がアクセスできる様にする
- 市民への避難勧告のよりよい方法について考える
- 緊急対策本部や都市計画の担当部署と協力して、災害時の手順書を作成、助言をする

## Koro Island High School

### 災害を生き抜く

#### 行動計画案

1. 復興に向けて、村全体で協働する
2. 災害警報に従い、予防措置をとる
3. 村の建物を守るために防波堤を建設する
4. 耐ハリケーン基準の建物の設置
5. 避難計画と避難訓練
6. 災害に対する意識を喚起する教育プログラム
7. 村の移転
8. より多くの村人を収容できる避難センターの建設を行政に要請する
9. 災害時および災害後における災害対策委員会の積極的関与
10. NGOによる援助支援

## Mongolian-Russian Joint School / Primary, Middle and High School No.6 of skhubaatar district in Ulaanbaatar

---

### 災害を生き抜くことについてモンゴルの10代若者の理解度

モンゴルの高校生の防災訓練計画が、将来、実質的な訓練を重要視した上でより強化されるべきであると提案する。例えば、実地訓練を含めることで、生徒たちが災害をより現実的に感じ、理解し、またどのような理由に基づいて行動を起こすべきかを判断することが出来るようになるだろう。

私たちは、生徒達が大災害から生き延びることを目的として、小学校、中学校、高校における毎月の訓練を企画するというプランを立てた。小学生達には、教育用のアニメを見てもらい、生徒たちの災害に対する理解度を毎月チェックすること。中学生達にも同じようにドキュメンタリー動画を見てもらい、また応急処置についての授業も行うこと。高校生達には、防災または災害時の救命についての授業を受けてもらうこと。

さらに、洪水の起きた地域付近の住民にライフジャケットと緊急時用ホイッスルを配ることは、有益であると考えている。また、突然の災害に備えて重要な書類等の入った避難用バッグを用意するよう、人々に奨励することも私たちのプランの一つである。

## Niue High School

---

### 災害の発生前、発生時、発生後、弱者を守るための安全対策

#### 情報の共有 — ニウエのサイクロンから学ぶ

次世代の災害への備えを強化するために、知識や情報を交換する。災害を経験した世代の記憶を、録音やインタビューを通して保存しておく。歴史や過去の経験を活かす。

災害教育プログラム — 災害に関する学校でのプログラムを継続することで、子供から祖父母に防災の知識を共有することができる。国立災害総合対策室の活動に高校生や若者を巻き込み、同世代や地元コミュニティへの普及活動の一端を担ってもらう。“Knowing is easy than Doing what we Know (知ることとは、行動するよりもたやすい)”。

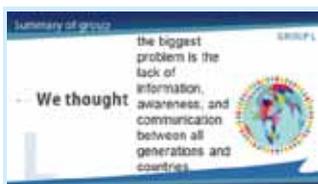
## 12. 分科会報告

### グループ L

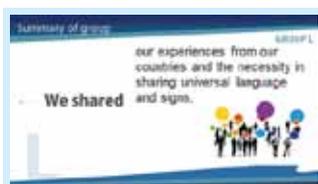


	参加国・参加都道府県	参加校名
国内参加校	大阪府	学校法人関西学院 関西学院千里国際高等部
	兵庫県	兵庫県立尼崎小田高等学校
	和歌山県	和歌山県立田辺高等学校
	奈良県	学校法人西大和学園 西大和学園中学校・高等学校
海外参加校	オーストラリア	Broome Senior High School
	ブラジル	School for Basic Education Professor João Widemann
	ネパール	Mahendrodaya Secondary School / Madi Secondary School / Sahid Smriti Awasiya Secondary School / Janata Secondary School / Laligurans Batika Secondary School / Motherland School
	ソロモン	White River Community High school

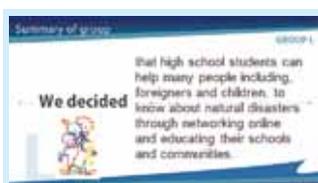
### 分科会報告



- ① 世代間及び国同士のコミュニケーション不足・意識不足・情報不足が一番大きな問題だと考えた。



- ② それぞれの国の経験と世界中で通じる言語や標識の必要性について共有した。  
例：日本では地震警報システムがあり、人々は警報を聞くとどのようにして自分の身を守るか知っている。



- ③ 各学校や地域の人々に対し、インターネット等を活用し、外国人や子供たちも含めた多くの人々が自然災害について知る手助けをしようと思う。

## 学校法人関西学院 関西学院千里国際高等部

---

### 「絆」エクササイズをしよう！

「絆」エクササイズとは

全身を使って、リラックスする。このエクササイズでは2人以上でチームになる。互いに助けが必要。音楽をかけながらやるのでリラックスできる。

このエクササイズは、子供からお年寄りまで誰もができる。

「絆」エクササイズの効果

避難所の人々はあまり体を動かすことができず、そのためこのエクササイズが役に立つ。互いに助け合うことによってコミュニケーションを図ることができ、一人にならない。音楽をかけながらの運動は体をリラックスさせることができる。年齢別に分けても難しくなりすぎたり、簡単になりすぎたりしない。

## 兵庫県立尼崎小田高等学校

---

### いっしょに歩こう！

1) 各自のニーズに合った防災計画を立てる

国際交流イベントなどに参加し、地域内の外国人住民から直接困っていることを聞く。外国人の視点から各自の避難計画を立てる。

2) 近隣外国人住民のために新たな防災マップを作成する

外国人にアンケート調査を行ったところ、防災マップにいくつかの改善が必要であることがわかった。例えば、防災マップには外国人にはわからないマークがいくつかある。外国人から寄せられた意見に基づき、マップを改良する。

3) 日本人、外国人を問わず地域住民を交えた防災イベントを開催する

私たちの高校でイベントを開催する。40名の地域住民（日本人20人、外国人20人）を招く。このイベントの目的は、住民の知識を高めること、そして地元住民が国籍を問わず顔を合わせ、防災に関するアイデアを交換する機会を提供することである。このイベントを通じて、災害が起きた時に直面する可能性のある問題を共有する。このイベントでは、地域のハザードマップを使った避難訓練も行う。参加者は、避難場所までの経路を知り、この訓練を通じて危険な場所に気付くこともできる。

## 和歌山県立田辺高等学校

---

### 若者のイニシアティブと積極的参加を支援しよう！

アクションプランの主な目的は、「若者のイニシアティブと積極参加を支援する」

私たちが主催する学生団体「SEEKER」は、田辺市と協力して、「T-café」と呼ばれる、外国人および地元市民向けの防災イベントを来年の7月に開催。

アンケート結果を田辺市、白浜町に提出し、防災に関する看板や掲示サインを多言語で作成する提案をする。

私たちの活動の目的は、災害派遣医療チームと同じく「生命を守る」こと。自らの命を守ることも大切だが、相互に助け合うことも重要だ。若者がイニシアティブを取り、積極的に参加するようになって欲しいと思う。

## 学校法人西大和学園 西大和学園中学校・高等学校

---

### 津波被害を避けるために

東日本大震災以前の津波の教訓を学ぶ。

生存者の体験談を共有し、大災害に見舞われた時にどうすべきか想像することによって、どの方向に避難すべきか、津波から自分の身をどう守るかを判断できると思う。

## Broome Senior High School

---

### 災害を生き抜く

最近ブルームを襲ったサイクロンと洪水の経験から、ブルームの若者向けの警報に関する教育プログラムや、サイクロンや洪水に対する備えが必要と考える。小学校および中学校のカリキュラムの一環として導入することを提案。また、地域全体としてもブルームが直面する自然災害の危険についての意識の喚起と、より効果的な備えが必要だと考える。このためブルームの生活を脅かすかもしれない自然災害とその対策についてのプレゼンテーションを行うことにした。

## School for Basic Education Professor João Widemann

### ブラジル、ブルメナウにおける洪水を生き抜く

気候に関する事象から身を守り、災害を防ぐために大切ないくつかのアクションを考えた。イタジャイ川沿いの治水施設（ダム）、ブルメナウ緊急時対応計画（アクションを防災、対応、建設の3段階に分ける）、「AlertaBlu」アプリ（全ユーザーに電子通知を送信）。

このほかにも、コミュニティで啓蒙活動を行い、各学校で一般市民に将来の洪水について教え、準備し、注意喚起する。

## Mahendrodaya Secondary School / Madi Secondary School / Sahid Smriti Awasiya Secondary School / Janata Secondary School / Laligurans Batika Secondary School / Motherland School

### ネパールにおける地震の備え

目的	担当機関	活動
緊急事態への備えを喚起	ネパール政府と関連機関	教育普及
国土に関する政策と計画の立案	ネパール政府	土地の選定および構造建築と建造物
緊急物資の管理	ネパール政府、市民、支援団体	緊急物資の支給と確保

## White River Community High school

### 災害に備え、意識を高める（学校及び家庭での減災対策、災害への意識向上、避難訓練）

その1：ソロモン諸島の学校カリキュラムに災害リスクと防災に関する科目を取り入れてもらえるよう教育省に要望を出す。そうすれば、全学年の生徒が自然災害の危険性と防災対策を学ぶことができる。

その2：自分たちの学校、周辺の学校に防災委員会を立ち上げ、防災意識向上活動や避難訓練を定期的に行う。

その3：ホワイトリバー地区の青少年グループと協力し、安全な避難と安全地帯を示すためのハザードマップ、案内標識、ポスター、図を作成する。

最後に、津波その他の災害意識などに関する番組の放送についてソロモン諸島の国営放送局の支援を行う。

# 13. 参加者アンケート

## 集計結果

事後アンケートは、海外参加者293名（生徒244名・引率49名）、国内参加者186名（生徒134名・引率52名）計479名を対象に行った。

その結果、海外参加者293名（生徒244名・引率49名）、国内参加者160名（生徒119名・引率41名）の合計453名から回答があった。（回収率95%）

### 1. 高校生サミットに参加した成果について

防災に関する知識については、「稲むらの火」の故事や濱口梧陵に関する知識が深まったかという問いにおいて「非常に深まった」、「ある程度深まった」との回答を合わせると、99%が深まったと回答している。また、「自分が住んでいる地域での被害想定」及び「防災対策」に関する知識についての問いに対し、「非常に深まった」「ある程度深まった」を合わせると96%が深まったと回答している。

また、他国の災害とその防災の知識についても、96%が「非常に／ある程度深まった」と回答、他の学校の発表や、アクションプランから新たな発見や気づきがあったかどうかとの問いについて、96%が「大いに／ある程度あった」と答えている。本サミットをとおして、災害とその防災についての知識が深まり、防災・減災の重要性の理解が進んだものと思われる。

更に、グローバルネットワークの育成という観点では、「他の国、学校の生徒との交流」、「動画などによる事前交流」について、それぞれ99%、89%が有益だと思うと回答しており、実際に参加者の86%が3人以上とメールアドレスや連絡先を交換したと回答している。

「私はこのサミットに参加したことで、今まで英語と防災活動を続けてきたことを誇りに思えました。学校内にとどまらず、日本中、世界中の人と意見交換が出来たことは自分自身の今後に大きく影響すると思います。私の学校の留学生にも、日本の自然災害を教えてあげるだけでなく、一緒に考えられる姿勢へと変えていきたいです。」との感想のように、英語をツールとしてグローバルな視点で防災・減災を考えていく姿勢がうかがえる。

### 2. サミット後の活動について

サミット後の具体的な活動についての問いに対して、防災学習の継続については、99%が継続の意思があると回答、自身の災害に対する備えの見直しについては97%、その他防災活動への参加や呼びかけが97%、被災地の復興活動への参加が97%となっており、積極的に取り組む姿勢がうかがえる。

今回のサミットで発表したアクションプランの実施意向については、「3か月以内に実施する」が28%、「半年以内に実施する」が34%、「1年以内に実施する」が22%となっており、合計84%が1年以内の実施意向を示している。

また、他の国や学校との協力については、「協力して防災活動をしたいと強く／ある程度思う」が97%と、他の国や学校との協力への高い意欲を示している。「ここで得た知識や経験を、今度は周りの人たちにも広めていけるように、アクションプランを頑張りたい。」の感想のように、今後の活動に対して前向きな姿勢で臨むものが多く寄せられており、高校生の意識の醸成につながっていることがうかがえる。

## 13. 参加者アンケート

---

### 総括

開会式において知事は「この和歌山で濱口梧陵さんの気概に触れ、津波への理解を深め、世界一進んだ地震津波対策を学んでください。そしてこのような知識とノウハウを生かし、将来皆さんの国の人々を救って下さい。それが皆さんの努めです。」と檄を飛ばしました。

これに対し、高校生議長は、閉会メッセージで「今回のサミットでは、すべての国にとって貴重な多くのことを学ぶことができました。防災という言葉は、単に私たちの命を守るだけでなく、私たちにとって貴重なものを守っていくという意味です。皆さんが学んだことを、皆さんの地域社会に持ち帰ってください。そして将来の災害に備えていきましょう。世界の防災においてリーダーとなるのは、私たち、若き津波防災大使です。だからこそ、私たちがしっかりと行動を起こすことで世界を変えられるということを忘れないでください。」と応えました。

このアンケート結果も、本サミットが掲げた将来の防災リーダー育成という目的を、充分達成したことを示しています。

# 13. 参加者アンケート

## 事後アンケート集計結果 概要

		国内参加者		海外参加者		合計			順位・%	
		引率	生徒	引率	生徒	引率	生徒	計		
1-1	【サミット】 最も有益であった活動は、何ですか。 3つ選んでください。									
	1. 発表のための事前学習	18	36	13	53	31	89	120	5	26%
	2. 分科会で発表したこと	17	56	18	70	35	126	161	4	35%
	3. 分科会で他校の発表を聞いたこと	12	36	28	127	40	163	203	3	44%
	4. 分科会でディスカッションしたこと	18	70	21	158	39	228	267	2	58%
	5. 様々な国と交流できたこと	28	102	19	152	47	254	301	1	66%
	6. 津波防災講演会を聞いたこと	12	21	17	45	29	66	95	7	21%
	7. 総会	4	19	8	42	12	61	73	8	16%
	8. 高校生サミットとして世界に向けて宣言をしたこと	1	19	17	60	18	79	97	6	21%
	1-2	【スタディツアー】 最も有益であった活動は、何ですか。 3つ選んで下さい。								
1. 稲むらの火祭り		-	-	26	155	26	155	181	1	62%
2. 避難訓練		-	-	34	136	34	136	170	4	58%
3. 稲むらの火の館見学		-	-	19	130	19	130	149	5	51%
4. 歴史的建造物見学		-	-	26	146	26	146	172	2	59%
5. 県内高校生との交流	-	-	18	153	18	153	171	3	58%	
2	「稲むらの火」の故事や濱口梧陵について（生徒の）知識は深まりましたか？									
	非常に深まった	19	76	45	230	64	306	370	81%	99%
	ある程度深まった	23	45	3	9	26	54	80	18%	
	あまり深まらなかった	0	1	1	4	1	5	6	1%	1%
全く深まらなかった	0	0	0	0	0	0	0	0%		
3	事前学習を通して、自分の住んでいる地域の被害想定やその防災対策について（生徒の）知識は深まりましたか？									
	非常に深まった	17	75	36	179	53	254	307	67%	96%
	ある程度深まった	22	40	10	59	32	99	131	29%	
	あまり深まらなかった	3	6	2	4	5	10	15	3%	4%
全く深まらなかった	0	1	0	2	0	3	3	1%		
4	他国の災害やその防災について（生徒の）知識は深まりましたか？									
	非常に深まった	18	77	39	187	57	264	321	70%	96%
	ある程度深まった	19	39	9	53	28	92	120	26%	
	あまり深まらなかった	5	6	1	1	6	7	13	3%	4%
全く深まらなかった	0	0	0	3	0	3	3	1%		
5	他の学校の発表やアクションプランから（生徒の）新たな発見や気づきがありましたか？									
	大いにあった	18	59	39	199	57	258	315	69%	96%
	ある程度あった	21	54	9	38	30	92	122	27%	
	あまりなかった	3	9	0	7	3	16	19	4%	4%
全くなかった	0	0	0	0	0	0	0	0%		
6	防災・減災の重要性を（生徒が）より強く感じるようになりましたか？									
	とてもなった	29	103	41	218	70	321	391	86%	99%
	ある程度なった	15	19	2	24	17	43	60	13%	
	あまりならなかった	1	0	1	1	2	1	3	1%	1%
全くならなかった	0	0	0	0	0	0	0	0%		
7	他の国・学校の生徒との交流は、（生徒にとって）有益なものとなったと思いますか？									
	強く思う	37	115	42	221	79	336	415	92%	99%
	ある程度思う	4	7	1	18	5	25	30	7%	
	あまり思わない	1	0	1	4	2	4	6	1%	1%
全く思わない	0	0	0	0	0	0	0	0%		
8	動画などによる事前交流は、（生徒にとって）有益なものとなったと思いますか？									
	強く思う	9	39	28	153	37	192	229	51%	89%
	ある程度思う	24	63	11	73	35	136	171	38%	
	あまり思わない	7	20	4	16	11	36	47	10%	11%
全く思わない	2	0	0	2	2	2	4	1%		
9	出会った他の学校の生徒と、メールアドレスや連絡先の交換はしましたか？									
	10人以上	4	53	16	154	20	207	227	50%	86%
	7人以上	4	32	7	29	11	61	72	16%	
	3人以上	19	24	16	32	35	56	91	20%	14%
全くしなかった	14	13	5	29	19	42	61	14%		

# 13. 参加者アンケート

		国内参加者	海外参加者	合計	%		
		生徒	生徒				
2 サミット後の活動について	1	もっと防災について学ぼうと思いますか？					
		強く思う	96	201	297	81%	99%
		ある程度思う	26	41	67	18%	
		あまり思わない	1	2	3	1%	1%
		全く思わない	0	0	0	0%	
	2	あなた自身の家の備えや避難経路を見直そうと思いますか？					
		強く思う	82	195	277	76%	97%
		ある程度思う	35	41	76	21%	
		あまり思わない	3	6	9	2%	3%
		全く思わない	1	1	2	1%	
	3	あなたの住んでいる地域や学校で、避難訓練がある場合は積極的に参加しようと思いますか？ また、ない場合は避難訓練の実施を呼びかけようと思いますか？					
		強く思う	76	175	251	70%	97%
		ある程度思う	42	56	98	27%	
		あまり思わない	5	3	8	2%	3%
		全く思わない	0	1	1	0%	
	4	地域の防災能力を高めるために、地域と連携した取り組みを進めようと思いますか？					
		強く思う	83	189	272	77%	97%
		ある程度思う	35	39	74	21%	
		あまり思わない	2	7	9	3%	3%
	全く思わない	0	0	0	0%		
5	被災地の復興活動に参加しようと思いますか？						
	強く思う	73	177	250	70%	97%	
	ある程度思う	45	50	95	27%		
	あまり思わない	5	6	11	3%	3%	
	全く思わない	0	0	0	0%		
6	発表したアクションプランは実施できそうですか？						
	3か月以内に実施	25	75	100	28%	84%	
	半年以内に実施	37	83	120	34%		
	1年以内に実施	24	53	77	22%		
	来年以降	37	21	58	16%		
7	今回参加した国や学校と協力して、防災に関する活動をしたいと思いますか？						
	強く思う	79	214	293	81%	97%	
	ある程度思う	38	20	58	16%		
	あまり思わない	6	3	9	3%	3%	
	全く思わない	0	0	0	0%		
8	学校に帰ってから、「世界津波の日」2018高校生サミットin和歌山の参加報告・発表を行いますか？						
	既に予定している	50	141	191	53%	69%	
	予定はないが必ず行う	13	46	59	16%		
	出来ればやりたい	44	53	97	27%	31%	
	行わない	14	2	16	4%		
9	これからも、このような国際交流の場があれば、積極的に参加したいと思いますか？						
	強く思う	110	221	331	91%	98%	
	ある程度思う	11	15	26	7%		
	あまり思わない	2	5	7	2%	2%	
	全く思わない	0	1	1	0%		

## 13. 参加者アンケート

### 参加者の感想

たくさん頂いたご感想、ご意見の一部を本レポートに掲載させて頂きました。皆様のご協力に感謝いたします。



サミットに参加できたことは一生に一度の機会なので、大変誇らしく光栄です。サミットに参加したことで、私は、世界が直面している問題に気づきました。つまり自然災害の影響力は非常に大きいので、その問題に打ち勝つ解決策を考えることが極めて重要であることに気づかされました。サミットに参加することによって、自分たちの国の状況を改善するために、情報を得ることやほかの国々と意見交換をすることがとても良い方法だと分かりました。  
(ブルネイ)



本サミットは夢に見た以上のものでした。たくさんのほかの国の人々と知り合い、防災についての知識を得たことはかけがえのない経験でした。再びこのようなイベントで、世界中のいろいろな地域の人々みんなと交流できる機会がある事を、心から望みます。  
(カナダ)



たくさんの学ぶべきことがあり、素晴らしい人々と出会える、このようなサミットに参加する機会を頂き大変感謝します。本サミットでは津波への認識がさらに深まりました。自身の家族だけではなく、国全体や諸外国の人々の人命を救うために、どのように自然災害を知らせる情報を提供すべきかについて、本当に考えさせられました。  
(クック諸島)



人生に残る経験であり、防災についてさらに知識を得ました。今回学んだことを全校生徒と教員、また地域の人々に伝えるよう努力します。そしてフィジーの教育省へサミットについて伝えます。  
(フィジー)



本サミットは防災に関してより多くの知識を得るだけでなく、世界中から集まった生徒たちと文化交流をする一生に一度の機会でした。  
(ギリシア)



とてもよく段取りされた分科会でした。特に高校生が責任を持って、滞りなく執り行う様子を羨ましく思いました。良くできました！（お疲れ様でした）サミットに参加することで、私たち、参加者は、自然災害に対して、適切で効果的な防災対策についての考え方に大きな影響を受けました。例えば、キリバスには地震や津波はありませんが、ひどい海岸浸食が起こっています。このことによって全住民が避難し、避難生活を送る場所を見つけなければならないかもしれません。本サミットは大変役に立ちました。  
(キリバス)

## 13. 参加者アンケート



私達にとっては初めて学ぶことばかりで、素晴らしい機会でした。

また、モルディブでは防災訓練のようなものは無いので、私たちにとって防災訓練に参加するのも初めてでした。他の国々と交わした議論はこれから植えられるのを待っている種のようなものだと思います。私たちが学んだ知識を実行し、地元の人々に自然災害への準備や防災意識を持ってもらうことによって、吸収した知識は実りあるものとなるでしょう。濱口梧陵から学んだ考え方と教訓により、私たちの国がこれから来る自然災害に対し準備できるよう精いっぱい努力します。

(モルジブ)



これはとても貴重な経験でした。自分の学校で実行すべき新しいことを学びました。本校でもそれがうまく機能したら良いと思います。有難うございました。

(メキシコ)



災害に対しての管理や備えに関して、他国の生徒の意見を聞き、そしてニュージーランドがどのように災害に対しての備えをしているかを比べることができたことがとても啓発的なものとなりました。

主な災害に対して私たち高校生ができる地域防災に関する新しいアイデアを得ることが出来ました。

(ニュージーランド)



日本と「世界津波の日」高校生サミットの主催者、実行委員の方々へは、ただ感激(称賛)と感謝しかありません。運営や管理がとても良くできていました。

(パプアニューギニア)



同世代の素晴らしい人々や、コーディネーター、通訳の方々とも知り合うことができる上に、災害について学び、他の国々が抱えている問題やその問題に対する観点について理解を深めることができる素晴らしい機会を頂き、大変うれしく幸せで感謝しております。“稲むらの火”や“濱口梧陵”に関してだけではなく、私たち高校生として取り組める対策について学びました。私たち一人一人が“濱口梧陵の精神”をそれぞれの国へ持ち帰ります。

(パラグアイ)



本サミットで防災についてよりたくさんの方のことを学ぶことができ、世界中の国の人々とお互いの知識を交換できました。

すばらしい目的の為に多くの国の人々を招き、本サミットを開催してくれた人々に大変感謝しております。

サミットで学んだ全ての知識を本国の人々に伝えることを約束します。

(ペルー)

## 13. 参加者アンケート



サミットはとても役に立つものでした。私たちはたくさんの環境や防災について学ぶと共に日本の文化や伝統について学びました。日本で訪れたすべての場所で、温かい歓迎を受けました。それは素晴らしい経験でした。私たちは防災の取組が継続的に改善し続けられるように責任を持って、義務を果たします。

私はサミットはあらゆる面で完璧だったと思います。

(フィリピン)



サミットはとても短い期間でしたが、他の国々と協力したり、その国々で起こった自然災害について、同じような、もしくは異なる状況、課題、影響力、問題を知ることを含め、サミット全てを楽しみました。

国や地域を守るための防災訓練を行うにあたり、私たちみんなが、知識、技能を学びました。

(サモア)



サミットが2週間ほどあれば生徒たちはもっと学ぶ事ができたでしょう。

下記の事を考慮してください。

a. サミットでの活動(サミット前の活動)が忙しい(時間的余裕がない)

b. 実際のプレゼンテーションと議論にもっと時間をかけるべき

(サモア)



サミットは人生における最高の経験だと思っています。

たくさんの新しい友人を作り、新しい経験をしました。“稲むらの火”は美しい概念です。

災害を最小限にとどめ、人の命を救うために一緒に取り組みましょう！

(スリランカ)



人々の生命を救うために自然災害への備えや、避難するために一緒に取り組むことの大切さを学べ、大変良いプログラムだったと思います。

生命を救うための不可欠な措置だけでなく、他国の文化についても学びました。日本文化についてもたくさんを知り、濱口梧陵の精神と稲むらの火で学んだことを持って帰ります。ありがとう日本。

(トンガ)



今回の経験は生徒にとって、様々な国の生徒から学ぶ事ができ、人生を変える様な機会になるものでした。こういった機会に大変感謝しております。生徒全員が日本の人々や文化、知識についてもっと知りたいので、いつの日か再び日本に戻ってきたいそうです。

スタディーツアーでの経験はとても価値のあるものでした。サミットでは、継続的な行動の重要性について議論が盛り上がりました。

このイベントの主催者、参加者、日本の人々へ有難うございました。

(米国)

## 13. 参加者アンケート



今回初めて参加しました。生まれも育ちも違う同世代の高校生が“防災”というテーマでコミュニケーションをとる事の大切さを肌で感じ、自分なりに足りない英語のスキルや発信力を磨くきっかけになりました。そして、自分から何かのアクションを起こすことで、異国の文化や考えを知る事が出来たので、とても良い経験になりました。私は今回学んだ経験を多くの人に伝え、国際交流に貢献したいと思います。

(北海道)



日本人生徒も一部でよいので海外生徒とスタディーツアーに参加できる方策が有ればと考えています。総会の最後に行ったペンライトによるセレモニーはとても素晴らしかったと思います。生徒たちの話し合いがスムーズに行えるようなワークシートを準備するなど、細かい面まで運営の気配りを感じました。

(北海道)



和歌山知事の「君たちはエリートだよ」という言葉が心に残っていました。

この言葉を重く受けとめ、災害時や災害対策に、みんなから頼れる存在となれるよう胸張って生きていこうと思いました。

英語で他国の方とディスカッションするという場面は将来山ほど出てくると思います。高校生のうちに体験する事ができ良かったです。たくさんの貴重な体験をいただき、ありがとうございました。

(北海道)



自分たちの考えや意見だけにとどまらず、こういった場で発表したり、ディスカッションすることで、より広い視野で、また色々な国や地域の人たちの考え方を吸収することができました。

ここで得た知識や経験を、今度は周りの人たちにも広めていけるように、アクションプランを頑張りたいです。また、今回英語での活動を通して、どうやったら相手に伝わりやすくなるのか、考え方の意識がよい方向に変わり良い体験となりました。

(岩手県)



今回、津波サミットに参加するのは初めてでしたが、様々な国の方とたくさんの交流ができ、とても良い経験となりました。

記念植樹では、ペアになったブルネイの方とお互いの国についてたくさん意見交換が出来て、とても良かったです。分科会では同じグループの発表を聞いて参考になる部分がたくさんありました。

正直、英語オンリーと聞いて、わたしが話の内容についていけるか不安でしたが、外国の方が聞き取りやすいよう、ゆっくりと話してくれて話が弾み、津波の事以外（自分の国の事など）についても話せて、とても貴重な体験となりました。

(宮城県)

## 13. 参加者アンケート



日本において、世界においても重要視されている災害防災について自分の力で調べ、知識を深めることが出来たことに自分の成長を感じました。

また、海外の多くの生徒たちとの文化交流、国内の生徒とも文化圏の違いを感じ、新しい世界との交流は有意義なものとなりました。

(千葉県)



私たちが4日目の活動を終え帰ろうとした時、震度4の地震が和歌山を襲いました。その時は、たまたま津波は発生せず余震もありませんでしたが、いつどこで被害にあうか分からないと感じました。それまで、デスクワークや避難訓練で津波について学んだ私達でしたが、いざ災害が来ると冷静に動くことが出来ませんでした。

災害についての知識を得るだけでなく、実際に綿密な訓練と臨機応変な行動を幅広い世代の人がとれることが大切だと思います。いつかは身の回りで起こる危険から自分の大切な人を救うために、若い世代から災害について学ぶべきだと思います。

(京都府)



今回の活動を通し自分が大成長したと感じました。学校での準備期間は色々な困難にぶつかりました。しかしどんな困難にあっても、三人で乗り越えてきました。本番のプレゼンテーションも大成功しました。また、いろんな国の高校生と友達になることができ、他の国のことを知ることができました。

改めて英語の重要性も感じました。これからも、この活動をバネにして、頑張っていきます。

(大阪府)



非常に素晴らしい機会でした。本校の生徒達にも大きな触発を与えて頂き感謝でいっぱいです。早速SGH中間研究発表会でも発表をし、様々な場で全校生徒にも本校参加者の活動が広く認知されるなど、大きな波動を広げております。3年間参加させて頂いて感じますが何かフォローアップのような、再度、刺激を与える場を設けるのは難しいのでしょうか？本校生徒は自主的に、オープンキャンパスでの防災啓蒙活動や広報物・グッズ・啓蒙ビデオの作成、防災甲子園への応募などにも取り組んでおります。サミットを通しての意識の変容から、行動がどのように変わったかまで追いかける事ができれば、成果としても分かりやすいのではないのでしょうか。(追いかけて大変ですが.....)

ともあれ、素晴らしいものでした。ありがとうございます。

(大阪府)

## 13. 参加者アンケート



48か国の高校生が集まり、防災について学ぶという貴重な体験に参加でき、とてもよかったです。

英語で話すのは難しかったです、伝わらなくても他の言葉に変えたり、絵をかいたりコミュニケーションの方法を身に付けることが出来ました。

一番心に残っているのは、片田さんの講演で、釜石の奇跡の教えを学んだことです。今まで以上に津波の事が身近な問題に思え、関心を持つようになりました。これからも防災や東日本大震災の復興で自分にできることをしていきたいです。

(奈良県)



2日間で、47か国もの人々と会うことが出来るという体験は貴重なものとなった。津波という誰にでも起こり得る災害について、住む場所も文化も異なる様々な立場から意見を交換することができ、より多方面から防災について考えることができた。今回議論して見つけた考えや提案は、津波サミットにとどまることなく、私たちの周りの人たちに広めていきたいと思う。

(和歌山県)



議論が深められるような仕組みが構築されていたり、宣言文に議論したことが盛り込まれていたり、参加者で作り上げるサミットという印象があった。グループでの行動の時間が多く取れ、1日目にレセプションがあったので、2日目の話し合いも大変スムーズにできたと思う。全体を通して中身の濃いサミットになったと思う。

(和歌山県)



楽しかった、大変だった、新鮮だった、興味深かった。いろんな思いが入り混じる、一言では言い表せないような経験だったと思います。会話も発表も英語でしなければいけなかったのはとても大変でしたが、それを超える楽しさがこのサミットにはあったのは事実です。それだけでなく他県や海外の防災状況について学べるのも新鮮で面白かったです。また、テレビでこのサミットの様子が放送されるのを見て、「貴重な体験をさせてもらえてたんだな」と度々思いました。本当に素敵な体験でした。有難うございました。

(和歌山県)



防災という一つのテーマについて様々な国の方と話し合うという貴重な体験をすることができて良かったです。当たり前のことですが、それぞれの国にはそれぞれの地理的な、または文化的な特徴の違いがあるので、発生する災害の種類や頻度も異なりました。その結果、行われている対策も違い、その違いを学ぶことができたのは良い経験です。また、災害をあまり体験したことのない国に災害を体験した自分たちだからこそ話すことのできる意見や考えを伝えることができてよかったです。

(広島県)

## 13. 参加者アンケート



今回津波サミットに参加して、各国の高校生と話し、交流ができたのはもちろん、世界中の防災の取組を知ることができ、良かったです。私が聞いた中では、日本が一番防災活動が進んでいました。

なので、日本で成功事例を伝えたりすることは大切だと思いました。国文化は違えど、目指しているゴール、幸せ像は通じるものがあるので心を一つに話し合うことができました。

もし、またこのような素晴らしい機会があれば参加したいです。

(高知県)



私はこのサミットに参加したことで、今まで英語と防災活動を続けてきたことを誇りに思えました。学校内にとどまらず、日本中、世界中の人と意見交換が出来たことは自分自身の今後に大きく影響すると思います。私の学校の留学生にも、日本の自然災害を教えてあげるだけでなく、一緒に考えられる姿勢、と変えていきたいです。

これからの課題は、地震や津波など、日本でこの先必ず起こる災害を様々な世代の人にもどのように伝えていくべきかをみんなで考え、繋げていくことです。

自分が出来ることを見つけて行動していきたいです。

(高知県)



世界津波の日高校生サミットに生徒と共に参加出来たことは、今までの種々の国際交流、海外研修を経験した以上のかけがえのない経験となりました。今まで交流したことのない同じ県内の生徒、教員、同じ日本国内、そして世界の生徒と教員が、同じ意識（防災・減災）などを持って語り合うことを通して、さらに高い意識をもって、防災への取組をする⇒しなければならぬと生徒も私（英語教員+防災担当）も考えを新たにすることができました。

いくら良い取組をしても、それを他の人、他国の人々に発信する（英語で伝える）には、単なる英語力ではなく、相手に理解してもらい、納得してもらえる表現力（押す力）が必要であると、海外からの生徒達の発表、ディスカッションを聞いて本当に感じました。

(高知県)



今回、私はたくさんの成長ができた機会だったと思います。日常生活では、英語だけを話すことは少ないので、慣れるまでは、少し時間がかかったけれど、慣れてしまえば、積極的に話しかけたり、ブリーフィングの時にメモができました。他国の発表を聞くと日本という国が、災害に対して対策をしっかりと行っていると感じました。この機会に、身の回りの災害対策を知り、私たちが出来ることを考えることができたので、これからはもっと現実的なものにして実施していきたいと思います。私はサミットに参加できて幸せです。

(熊本県)

「世界津波の日」2018高校生サミット in 和歌山 報告書

---

2019年2月発行

編著・発行 世界津波の日高校生サミット実行委員会  
〒640-8585 和歌山県和歌山市小松原通1-1

※本書に掲載している写真については、東アジア・アセアン経済研究センター（ERIA）から提供いただいたものを含んでいます。

---

無断複製、転載を禁じます。







和歌山県



広川町